

アンティオキア派の一背景としての偽イグナティオス書簡集研究
—著者問題と4世紀キリスト教史におけるその位置付け—
(long version)

東京大学大学院総合文化研究科
博士課程 砂田恭佑
ks.tkb3594@gmail.com

目次

凡例	2
はじめに	3
I. 「偽イグナティオス」をめぐる問題	5
I. 2. 真・偽イグナティオス書簡集とその構成	6
I. 3. 偽作書簡の概要と特徴	7
『カッソボラのマリアからイグナティオスへの手紙』	7
『イグナティオスからマリアへの手紙』	8
『タルソスの人々への手紙』	8
『フィリッポイ（フィリピ）の人々への手紙』	9
『アンティオキアの人々への手紙』	9
『アンティオキアの輔祭ヘロンへ』	10
I. 4. 改竄書簡の諸特徴	11
I. 5. 偽イグナティオス=改竄書簡・偽作書簡著者に関する先行研究	11
II. 著者とその意図	13
II.1. 「長文の説明」との関係	13
☆教会史的状況①	13
☆「長文の説明」との類似	14
☆教会史的状況②	19
II.2. eirenicon 説と Gilliam による批判	23
II.3. Perler による位置付け	24
II.4. Hagedorn 説と Gilliam による批判	27
II.5. 偽作・改竄の地理的・人物的設定と時代背景	29
☆教会史的状況③	35
地図	39
地図①イグナティオス書簡関係	39
地図①キリキア近辺	40
文献一覧	41
原典	41

研究文献 42

凡例

・七通の書簡（エフェ、マグ、トロ、ロマ、フィラ、スミュ、ポリュ）の著者を真正イグナティオス、六通（マリ・イグ、イグ・マリ、タル、フィリ、アン、ヘロ）の書簡の著者及び真正書簡への改竄を行った人物を偽イグナティオスとし、それぞれ真イ、偽イと略す。また七通を真正書簡、六通を偽作書簡、偽イの手が入った七通を改竄書簡と呼称する

・混同の可能性がある場合、パウロ書簡には「パ・」を付し、真偽イグナティオス書簡にはそれぞれ「真イ・」「偽イ・」を付す（例：パ・フィリ 3:16＝パウロ『フィリピの信徒への手紙』3章16節、偽イ・ロマ 1.1＝偽イグナティオス『ローマの人々への手紙』1章1節）

・偽作書簡の略称

マリ・イグ	『マリアからイグナティオスへの手紙』
イグ・マリ	『イグナティオスからマリアへの手紙』
タル	『タルソスの人々への手紙』
フィリ	『フィリッポイ（フィリピ）の人々への手紙』
アンテ	『アンティオキアの人々への手紙』
ヘロ	『ヘロンへの手紙』

・発表者による改竄書簡の訳文における記号

無標：真作イグナティオス書簡（Lindemann und Paulsen 1992）と共通の部分

[]：真作書簡に存在するが改竄書簡に存在しない部分

⟨ ⟩（ギリシア語原文は太字）：改竄書簡にしかない部分

下線：発表者による、他テキストとの共通部分の強調など

()：言い換え（別訳）

□：意味を明瞭にするための補足

・偽作・改竄ともに、偽イグナティオスに関する箇所では、エписコポス・プレスビュテロス・ディアコノスの三つ組みをすべて「主教」「司祭」「輔祭」と表記する。このため既存の真作書簡集の邦訳（「監督」「長老」「執事」と表記を異にすることとなる（ただし括弧の中にこちらの訳を入れる場合もある）。これは、4世紀の偽イ本人にせよ、それを手に取った読者にせよ、上記の三つ組みで彼らが了解したのは初期教会の不明瞭な職階ではなく制度として確立した「主教」「司祭」「輔祭」であったはずであるという考えに基づく。もっとも、偽イはあくまで真イ本人のつもりで執筆しているのだから、真作書簡（2世紀初め）の時代背景に合わせて「監督」「長老」「執事」とすべきだという異論も出うると思われる。しかし

4世紀のキリスト教徒が（たとえ高い学識を持つのものであっても）同じ語で表現されていた同時代の職階と初期教会の職階の差異にもとづき、文章から得られる理解を相対化するような発想があったかどうか疑わしいとは思えないというのが個人的な見解である。「マリアからイグナティオスへの書簡」の概要も参照のこと。

はじめに

①発表の位置付け

- ・本発表は、発表者が2020年6月14日の古代・東方キリスト教研究会で行った「アンティオキア派聖書釈義の一背景としての「アレイオス派」ユリアノス」の続き
- ・上記の会において、Hagedornが「アレイオス派のユリアノス」(Julianus Arianus)と呼ぶ『ヨブ記註解』著者にして、同じく偽イグナティオス書簡集と『使徒教憲』(*Constitutiones Apostolicae*. 以上を「ユリアノス文書」と総称した)の著者でもある人物に着目し、アンティオキア派、特にヨアンネス・クリュソストモスとJAが、同じ380年ごろ同じシリアのアンティオキアで活動し、『ヨブ記註解』をそれぞれに著わし、教理面で対立していた、と位置付けた。そして「ユリアノス文書」全般に現れる使徒、使徒教父、初期教父に関する記述を検討し、ヨアンネス・クリュソストモスのいくつかの説教がそれに対抗するものであったとする仮説を発表した
- ・発表者は現在、前回の発表では単語を拾うレベルの検討しかできなかった「偽イグナティオス書簡集」を改めて詳細に検討している。現時点で、前回の発表から継続する点と大きく変更する点がある

継続する点:「アンティオキア派」の背景としての関心

変更する点:偽イグナティオス書簡集が「ユリアノス文書」に含まれる、というHagedorn説の棄却

→ヨアンネス・クリュソストモスが「アレイオス派のユリアノス」の『ヨブ記註解』、および著者不明の「偽イグナティオス書簡集」を知りそれに対抗していたという仮説は現段階でも維持しているが、それらは別の著者によるものだと想定し、「アンティオキア派」の神学、聖書釈義、説教との関連を探っている

- ・今回の発表では、このうち「偽イグナティオス書簡集」の著者と思想、その目標を検討する

②三位一体論争（特にギリシア語圏）における用語について

- ・コンスタンティヌス1世による325年のニカイア公会議で父・子・聖霊を信ずべきことおよび父なる神と子なる神の「同一本質」(ホモウーシオス)の教理が採択され、アレイオス派の教理(父なる神に対し、子なる「神」は従属的な存在であると説く。これを従属論と呼ぶ)が異端とされた後、復権したアレイオス派を迎えつつ従属論的な信条へ立場を修正し

た多数派 (①) と、ニカイア信条を保守したアタナシオスらのグループ (②) に分かれて争い、帝国東部では前者、西部では後者が優勢であった (340 年代まで)。350 年代中盤以降、①の中でも父と子が本質において相似とするグループ (③)、本質という用語の使用をやめ父と子は単に相似とするグループ (④)、父と子の本質は異なるとしたグループ (⑤) が生まれ争った。コンスタンティウス 2 世は 360 年に④を正統と決定し、ウェアレンス帝 (在位 364-378) もそれを引き継ぐ。そのような中②ニカイア派にカッパドキア教父たちが登場して聖霊の神学を発展させ、また「一つの本質、三つの自立存在 (ヒュポスタシス)」と教理を再定義して同一本質派の勢力拡大に貢献し、テオドシウス 1 世即位とともに 381 年第一コンスタンティノポリス公会議が開かれ、②の勝利が決定する

- ・三位一体論争の用語
- ・伝統的なもの・通俗的なもの：①アレオス派②正統派、ニカイア派③半アレオス派 (semiarrians) /マケドニオス派 (macedonians) /反聖霊派 (pneumatomachi) ④アレオス派、アカキオス派⑤エウノミオス派 (20 世紀前半まで)
- ・教理グラデーション式：①アレオス派②同一本質派③相似本質派 (homoiousians) ④相似派 (homoians) ⑤非相似派 (Anomoians) (ケリー、マルーなど 20 世紀後半)
→前者は異端カタログ、後者は教会史のジャンルで教父たち自身が使用した範疇だが、いずれも「正統派」あるいは 5 世紀以降のバイアスがかかっている。依拠するところの公会議 (ニカイア派) であつたり「開祖」(アレオス派、マケドニオス派) であつたりと、命名の基準がまちまちであるという問題もある。Hanson 以降、信条と集団目標の関係や集団名の適用に対する自省が顕著に。それとは別に、日本語限定の問題で言えば、ウーシアを本質と訳していいのか (小高氏の諸信条の訳では「本体」、ホモイオスを相似と訳していいのか
- ・本論文 (扱うのは 330 年以降) での呼称
 - ①エウセビオス派 (Eusebians) : 特に 341 年献堂式信条を採択したグループ。ここでのエウセビオスとはニコメディアのエウセビオスのこと。350 年代後半は③④⑤に分裂
 - ②A : ニカイア派 (pro-Nicenes) /同一本質派 (Homoousians) : 西方教会やアタナシオスに連なるグループ)
 - ②B : 新ニカイア派 (neo-Nicenes) /同一本質派 : カイサレイアのバシレイオスやアンテイオキアのメレティオスが率いる、教理の再解釈を通してニカイア信条を掲げようとするグループ
→それぞれ前者は集団で弁別するとき、後者は信条観で弁別するとき使用
 - ③相似本質派 (Homoiousians) : 358 年のアンキュラ教会会議、359 年のセレウキア教会会議で多数派を占めた人々。ただしアンキュラのバシレイオスのような教理を鮮明にしようとする者と、エルサレムのキュリロスのような 4 世紀中盤に固まった考え方を保守して教理論争の激化を避けようとする人々では温度感に差がある。両者を含む際

は「～で多数派を占めた人々」のような回りくどい言い方をする。360年以降「マケドニオス派」「反聖霊派」と呼ばれ、前者の名はコンスタンティノポリス主教マケドニオス（360年追放）に、後者の名は彼らが父と子に対し同一本質の神性を認めながら聖霊のそれを認めなかったことに由来するが、いずれもバイアスの強い語であるため使用を避ける

④相似派 (Homoians) : 357年以降形をはっきりさせたグループで、集団の原理は「新信条作成派」というようなものだが、それを具体的には「本質 (ウーシア)」の使用を禁じ「相似」という語で示そうとしたのは事実であり、引き続き使用する。しばしばカイサレイア主教アカキオスにちなんでアカキオス派 (Acacians) と呼ばれ、彼が主導的立場にいたことは間違いないが、彼一人によって代表される集団でもないため、使用を避ける

⑤異本質派 (Heterousians) : 元々エウノミオス派、非相似派と呼ばれていた、アエティオスやエウノミオスが指導したグループ。その教理のポイントは子と父が相似でないこと (消極的定義) ではなく異なる本質を有すること (積極的定義) である、とする Hanson の指摘・提案に従ってこう呼ぶ。エウノミオス派 (Eunomians) という呼称は、マケドニオス派やアカキオス派に比べれば正当な呼称だが、他に合わせて異本質派と呼ぶか、「エウノミオスにより叙階されたグループ」のような回りくどい言い方をする

I. 「偽イグナティオス」をめぐる問題

I. 1. アンティオキアのイグナティオスについて

- ・「使徒教父」の一人で、アンティオキアの監督にしてローマでの殉教者。ライオンに身体を食べさせた逸話で知られる
- ・一次史料：その書簡。アンティオキアの監督 (主教) として捕縛され、処刑のためローマへ向かう途上で執筆した書簡が残る
- ・エウセビオス『教会史』が、イグナティオスの書簡が 7 通あることをそれぞれの宛先と共に伝える。その証言によればトラヤヌス帝代に殉教した人物¹
- ・遺骸は 4 世紀末の時点でアンティオキア市ダフネ門外の共同墓地に存在²
→どこかの時点でローマからアンティオキアにもたらされたと推定
- ・遅くとも 5 世紀には、イグナティオス詩篇を交唱する習慣をアンティオキアに導入したとの伝承があった³
- ・テオドシウス 2 世 (在位 408-450) 時代にアンティオキアのテューケー (運命) 神殿が聖イ

¹ エウセビオス『教会史』3. 22 および 3. 36.

² ヒエロニムス『著名者列伝』16 章 (PL23, 667)。

³ ソクラテス『教会史』VI.8.10. なおキュロスのテオドレトスは同じ習慣を、4 世紀中盤にのちにメレティオス派の「幹部」となるフラウィアノスとディオドロスが導入したと伝える。『教会史』II.24.9.

グナティオス教会に改造される⁴

I. 2. 真・偽イグナティオス書簡集とその構成

・エウセビオス・ヒエロニムスが伝える書簡7通を伝える写本 (middle recension) とともに、それに含まれない書簡5通+1通 (偽作書簡) を含み、7通それぞれの本文も長い形で (改竄書簡) 伝えるギリシア語写本が存在する (long recension)。ほかに書簡3通しか含まない short recension もある。15世紀以来議論があったが、17世紀の Ussher と Vossius、19世紀の Lightfoot と Zahn が主張した、7通のみが真作で残りは後世の偽作とする説が現在多数派を占める⁵

○short recension (短縮版) : シリア語でのみ伝承 (Cureton 1845)

エフェソスの人々への手紙

ローマの人々への手紙

スミュルナの監督ポリュカルポスへ

○middle recension 真作イグナティオス書簡=真イ

書簡

起草地

エフェソスの人々への手紙

スミュルナ (21.1)

マグネシアの人々への手紙

スミュルナ (15.1)

トラレスの人々への手紙

スミュルナ (12.1)

ローマの人々への手紙

スミュルナ、エフェソスを通じて (10.1)

フィラデルフィアの人々への手紙

トロアス (11.2)

スミュルナの人々への手紙

トロアス (12.1)

スミュルナの監督ポリュカルポスへの手紙

トロアス。そこからからマケドニアのネアポリスに行くことに (8.1)

・スミュルナ・グループとトロアス・グループ。アジア地方を北上しエーゲ海を渡る行程に一致

☆ラテン語訳 : “Anglo-Latina”. Ussher が 13 世紀の、おそらくロバート・グロステストによる訳だと結論付け、Lightfoot がそれに同意⁶

⁴ エウアグリオス『教会史』I.16.

⁵ 他にラテン語でしか伝承されていない書簡が4通あるが中世の偽作とされており、本発表では扱わない。Lightfoot, Zahn 以降にも long recension を真作とし middle recension をその短縮版とする論者もあるが、本発表では取り上げない。それらの議論については、Brent, 95-143 を参照のこと。

⁶ Lightfoot, II.1.78; cf. Funk und Diekamp 1913, LVI.

○long recension 偽イグナティオス書簡集

書簡

マリアからイグナティオスへの手紙

マリアへの手紙

トラレスの人々への手紙

マグネシアの人々への手紙

タルソスの人々への手紙

フィリップイ (フィリピ) の人々への手紙

フィラデルフィアの人々への手紙

スミュルナの人々への手紙

スミュルナの主教 (監督) ポリュカルポスへの手紙

アンティオキアの人々への手紙

アンティオキアの輔祭 (執事) ヘロンへの手紙

エフェソスの人々への手紙

ローマの人々への手紙

起草地

「ザルボスのネアポリス」

監視・牢獄中とだけ言及、護送は無し。

アンティオキア? (2.1)

スミュルナ (12.1)

スミュルナ (15.1)

フィリップイ (10.2)

レギオンからローマへの途上 (15.1)

トロアス (11.2)

トロアス (12.1)

トロアス。そこからマケドニアのネアポリスに行くことに (8.1)

フィリップイ (14.1)

フィリップイ (8.1)

スミュルナ (21.1)

スミュルナから、エフェソスを通じて (10.1)

書簡がこの順番に並んでいる理由は不明。本研究では Funk und Diekamp の判断を尊重する

☆ラテン語訳 : *vetus Latina*. 遅くとも 9 世紀以前⁷

☆アルメニア語訳:相当早い時期(5世紀)と推定されるが、同時にギリシア語版に無い *figura etymologica* の使用からシリア語を通した重訳と認められる⁸

I. 3. 偽作書簡の概要と特徴

『カッソボラのマリアからイグナティオスへの手紙』

・書簡集中唯一宛先に出る女性で、イグナティオスに書簡を宛てている人物としてはポリュカルポスと並んでいる。書簡の題からわかる通りカッソボラ出身だが、「ザルボスのネアポリス」にて生活している模様 (両都市については後述)⁹。イグナティオスに恭しく¹⁰アナザルボス主教・カッソボラ司祭の派遣を要請する¹¹が、彼がすでに逮捕されていることを知

⁷ Lightfoot II.1 125-6

⁸ *ibid.*, 86ff.

⁹ マリ・イグ 1.1.

¹⁰ 同 5.1-3.

¹¹ 同 1.1.

らない人物として描かれる。なお派遣を要請する際、指名した人物が若年であることを懸念し¹²、聖書引用を駆使して若い人物が要職に就いた例を挙げる¹³

『イグナティオスからマリアへの手紙』

・イグナティオスはその学識を（高度に文学的な文体で）¹⁴褒めつつ、自身が捕縛されていることを告げて¹⁵、聖職者の叙階・派遣を承認し¹⁶、聖書の学識を褒める¹⁷。イグナティオスはマリアがローマの前司教〔監督〕アナクレトスのもとにいた時のことを思い返し、その恩を十全に返していると激賞する¹⁸。最後に「受難と肉における出生を拒む者たち」への警戒を促し¹⁹、アンティオキアの人々からの挨拶を伝える²⁰

→純真で学識深いマリアの丁寧な手紙に対し、それが受け入れられたことと逮捕が今しがたなされたことが告げられ、その後のイグナティオスの殉教譚を何となく知っている読者の注意を引く仕掛け。同時に異端への警戒という真正書簡から引き継いだ主題をも導入する

『タルソスの人々への手紙』

乱暴な護送者たちによる疲労を告白したのち²¹、2章で様々な三一論・キリスト論的異端説を列挙、3章以降の各節でそれに対する反駁を、聖書引用を交えて展開。それぞれ、仮現論（3章）、神の子≠イエス論（4章）、サベリウス主義（父受肉説）（5章）、「裸の（単なる）人間」論（6章）、肉体非復活論（7章）。倫理的勧告²²、聖職者の叙階遵守の勧告²³、夫、妻、子、親、主人、奴隷への各勧告²⁴。「私はあなた方にアンティオキアの教会を託します。……神の人ポリュカルポスにはシリアの教会を託すつもりです」²⁵、挨拶

¹² 「はじめに」に書いたとおり、プレスビュテロスを経老と訳してしまうと、本書簡に出る、「カッソボラ司祭にふさわしい若い人物」が「カッソボラ長老にふさわしい若い人物」となってしまふ。そのように偽イが認識していたならば、「長老」の意味合いについて一言二言あつてしかるべきだろうが、本書簡ではとにかく主教（エписコポス）であれ、司祭であれ、預言者であれ、王であれ、資質と年齢は本質的に無関係なのだ、という論法で一貫している。やはり「司祭」と訳さないとつじつまが合わないと思ふは考へる。

¹³ マリ・イグ 1.2ff.

¹⁴ イグ・マリ 1.1-2

¹⁵ 同 2.1-3.

¹⁶ 同 3.1.

¹⁷ 同 3.2

¹⁸ 同 4.1.

¹⁹ 同 5.1.

²⁰ 同 5.2.

²¹ タル 1.1.

²² 同 8.1.

²³ 同 8.2

²⁴ 同 9.

²⁵ 同 10.1-2.

『フィリッポイ（フィリピ）の人々への手紙』

信仰の「同じ基準」[パ・フィリ 3:16]として父・子・聖霊の種別とそれぞれの唯一性を強調。各位格の特性が説き明かされる²⁶。続いて「以上を……信じる者は幸い、信じないものは呪われています、主を十字架にかけた者以上に。というのも、この世の支配者は、誰かが十字架を拒むときに喜ぶのです」²⁷。初めはこの「この世の支配者」=サタン²⁸を3人称で非難しユダヤ人・ギリシア人（異教徒?）・異端者すべてを生んだ者とするが²⁹、5章以下ではサタンに2人称で語りかけ、キリストの生涯を通じて起こった出来事を再話する³⁰。この「悪魔弾劾文」（砂田による仮題）は長大で、繰り返しも多い（本箇所は著者同定の際に一つの鍵となるので後述）。そのあとで聖職者への聴従の勧告³¹、夫、妻への勧告³²、ユダヤ教の祭日をとともに祝う信徒を弾劾³³、この弾劾は最後の挨拶にも尾を引く³⁴

『アンティオキアの人々への手紙』

自身が去ったあとアンティオキアが「肉・霊的な心の一致（ὁμόνοια）」に基づいて過ごしていることを聞いて安心したことを伝え³⁵、異端を警戒しつつ「使徒たちの教規（διδαχή）、律法、預言者」を守るよう勧告³⁶。「万物の父」「私たちの主」「主の人間化（ἐνανθρώπησις）」「主の受難」それぞれについて、預言者（3章）、福音書記者（4章1-2節）、使徒たち（4章3節）がそれぞれ一致して証言していることを説く。それを覆そうとする異端者を警戒し罵倒³⁷。パウロとペトロの弟子となり、イグナティオスの前任者エウオディオスを思い起こすよう勧める³⁸。司祭、輔祭、民、乙女たちへの勧告³⁹。夫、妻（夫を名前で呼ぶことを禁止）、親、子への勧告⁴⁰。主人、奴隷への、ヨブの古事を引き合いに出した勧告⁴¹。無為を戒め、皇帝・支配者への従順を説いて⁴²、司祭・輔祭⁴³と下位聖職者たち（4世紀以降にし

²⁶ フィリ 1.1-3.2

²⁷ 同 3.3.

²⁸ 真イ・トラ 4.2 では「この世の支配者」（ὁ ἄρχων τοῦ αἰῶνος τούτου）とだけあるところに、偽イは「-たる悪魔」（ὁ διάβολος）を付加している。ゆえに本書簡でも同じものと理解する。

²⁹ 同 4.1-4.

³⁰ 同 5.1-12.3

³¹ 同 13.1

³² 同 13.2.

³³ 同 13.3.

³⁴ 同 14.2.

³⁵ アン 1.1.

³⁶ 同 1.2.

³⁷ 同 5.1-6, 2.

³⁸ 同 7.1.

³⁹ 同 8.1-2.

⁴⁰ 同 9.

⁴¹ 同 10.1-2.

⁴² 同 11.1-2.

⁴³ 同 12.1.

か見られないものを含む) 44への挨拶、パトロンとおぼしきカッシアノスとその家族 45、エフェソス・マグネシア・トラレス各主教からの「よろしく」 46、挨拶の締め、次の主教に挨拶、締め 47

『アンティオキアの輔祭ヘロンへ』

聖なる生活を励ましつつも、ぶどう酒と肉を完全に断ったりしないように戒める 48。そのあと、他書簡における司祭・輔祭への勧告とは若干トーンが異なる、いわば主教に対する心得を伝授する(主教に後継者指名の権利はないため、そう明言はしないが「今からはアンティオキアにある主の民をあなたが導き出すのです」 49とは言われる)。主要なもの、興味深いものを挙げる:「教え戒められているところ」(διατεταγμένα)を外れて語るものはいかに偉大にみえても羊の皮をかぶった狼 50、十字架・受難否定論者は敵 51、律法と預言者を否定する者は反キリスト、「裸の間」論者はキリスト殺しのユダヤ人 52。寡婦を保護すること 53、主教なしに何事も行わないこと 54、年が若いということで軽んじられないようにすること 55。奴隷、女性を蔑まず敬意をもって接すること 56。高慢を避け、夫と妻に愛し合うよう勧めること 57。イグナティオス自身が養育したヘロンが自身を模倣してくれるように、その前途を生まれざる父と主イエス・キリストが守ってくださるよう願う 58。「私はあなたにアンティオキアの教会を託します。私はポリュカルポスにあなた方をイエス・キリストにおいて託しました」 59。自身とヘロンをモーセとヨシュアに比定 60。カッシアノスとその家族、ラオディケイア、タルソス、「ザルボスのネアポリス」主教マリス、[カッソボラの] マリアに「よろしく」 61。

44 同 12.2.

45 同 13.1.

46 同 13.2.

47 同 14.

48 ヘロ 1.1-2.

49 同 8.3: “σὺ γὰρ εἰσάξεις ἀπὸ τοῦ νῦν καὶ ἐξάξεις τὸν λαὸν κυρίου τὸν ἐν Ἀντιοχείᾳ.”

50 同 2.1.

51 同 2.2.

52 同 2.3. 「教え戒められているところ」(διατεταγμένα) はディダケーと同じか(アンティオキア 1, 2)。アンティオキア権威の抛り所の問題(アンティオキア 1章 2節に一致)と、教理の正統性の問題(タルソス 3章と 6章に一致)とが、互い違いに配列され、両者が実のところ一体であるものと呈示している点に注意。

53 同 3.1.

54 同 3.2.

55 同 3.3.

56 同 4.1-2.

57 同 5.1-2.

58 同 6.1-2.

59 同 7.2.

60 同 8.2.

61 同 9.1-3.

☆偽作書簡の諸特徴

◇真作の文言との意図的な併行

◇真作 7 通に共通のフォーマット、即ち長い宛名を含む序文、本題、挨拶の伝達、挨拶。なお最後の部分に、マリアとの往復書簡を除き、書簡を書いた都市を明示することも真作と共通

◇全体的に、それぞれ主題を持っている（真イ書簡の方がより雑多な話題を含む）

*マリアから/へ：聖職者の年齢と適性

*フィリッポイ：各ヒュポスタシスがまことに一であること、それを否定する悪魔への非難

*アンティオキア：旧約・新約の証言が諸々の主題において一致していること、教会各部分の務め

*ヘロン：聖職者の務め

・真イの仮現論批判を発展させたような多様な異端反駁

・祭日規定：「十四日派」批判を反映？

・「単独監督制」を発展させたような教会職階論

・周到な状況設定

I. 4. 改竄書簡の諸特徴

・真作書簡 7 通のフォーマットを大きく変更しないまま、多数の挿入を行う形で改竄

・それ以外で特筆すべきは、

◇真イの素朴な「神と主」などの呼びかけを改め、神・キリストの称号を明瞭にする

◇地名の補足（シリア→アンティオキア）

◇テモテやクレメンスなど、使徒の弟子たちの名を挙げる

◇異端者の名を具体的に挙げる

◇（しばしば真イグナティオスの文学的工夫を無視した）明瞭化

◇神学的表現

◇三位一体と教会位階が直接一つのヒエラルヒーをなすような文言が見られること

◇祭日規定

→偽作書簡の特徴ともおおむね一致。いずれものちに具体的な形で検討

I. 5. 偽イグナティオス＝改竄書簡・偽作書簡著者に関する先行研究

・先行研究：quot homines tot sententiae の状態。何人もの研究者がそれぞれ異なる意見を表明している⁶²

⁶² Gilliam 2017, 99-118 をもとに、発表者が年代順に並べ替えた。なお 17 世紀における議論は本発表では割愛した。導きとしては、Lightfoot II.1.243-5.

- ・ Zahn (1873) : カイサレイア主教アカキオス (366 没、相似派)
 - ・ Lightfoot (1889) : ①改竄者と偽作者は同一と主張②4 世紀中盤以降③『使徒教憲』からの借用あり④あらゆる教理的立場を調停しうる eirenicon⁶³
 - ・ Amelungk (1899) : エウセビオス派の一部が採択したアンティオキア第四信条に付属する「長文の説明」(マクロスティコス、344/5 年) との類似性を指摘
 - ・ Funk (1901) : アポリナリオス派
 - ・ Perler (1958) : エメサ主教エウセビオス (361 以前没) との類似性を指摘。タルソス主教シルヴァノス (369 没) が著者だと注釈で示唆
 - ・ Hannah (1960) : 聖書引用の型に基づき改竄者と偽作者は別人であると主張
 - ・ Ford (1961) : 110-300 年のどこかで、反グノーシス派的意図をもって編纂
 - ・ Weijinborg (1969) : アンティオキアの (対立) ニカイア派主教エウアグリオス (在位 388-92)
 - ・ Hagedorn (1973) : 異本質派 (エウノミオス派) のユリアノス (「アレイオス派」のユリアノス) で、『ヨブ記註解』『使徒教憲』と同一著者
 - ・ Smith (1986) : アンティオキアの相似派、364-373 年
 - ・ Gilliam (2017) : Amelungk に従って「長文の説明」を偽イが資料として用いたと判断。344/5 年より数年以内に、キリスト論が明瞭化していない時期に成立したことによりその三一論における同等説と従属説の併存を説明⁶⁴
 - ・ Brennecke (2018) : カイサレイアのエウセビオスの伝統を継ぐアカキオスなどの相似派
 - ・ Vinzent (2019) : 人名・地名に注目。碑文コーパスを分析しつつ、4 世紀にタルソスやアンティオキアから遠くないアナザルボスで作られたとする
⇒大まかな合意が取れていること
 - A. 偽作書簡・改竄書簡は 4 世紀の同一人物の手による (Hannah, Ford を除く)
 - B. 「正統派」(たとえば 381 年の第一コンスタンティノポリス公会議の立場) ではない
 - C. 確かに従属論的傾向を持つが、異本質派のような極端な神学を擁する人物でもない (Hagedorn を除く)
- ⇒議論が教理に集中しすぎており、しかもその大半は文言をいくつか抜き書きして任意の教理的傾向を持つテキストと比較する手法。意義がないわけではないが、例えば Hagedorn による語彙・措辞の比較や、Vinzent が改めて注目したような地理・人物的設定の分析と総合する必要がある (マリアとは誰? なぜタルソス・フィリピ宛? ヘロンとは誰?)

⁶³ ギリシア語 εἰρήνη「平和、和平」の形容詞の名詞化用法に由来する単語で、「平和提議」、特に宗教的係争に対する仲裁提議を指す。教父時代にはふつう中性複数 (γράμματα を含意) か女性単数 (ἐπιστολή を含意) で用いられ、主教同士が相互の交わりを確認したうえで送りあう書簡を意味した。Lampe, s. v. “εἰρηνικός”, a. 4, 421. くわしくは II.2 を参照のこと。

⁶⁴ Gilliam 2017, 225-6.

- ・発表者は、
- ①「長文の説明」との類似性
- ②eirenicon 説と Gilliam による批判
- ③Perler による位置付け
- ④Hagedorn 説と Gilliam による批判
- ⑤偽作・改竄の地理的・人物的設定

という諸論点から議論を展開する。

II. 著者とその意図

II.1. 「長文の説明」との関係

- ・ Amelungk, Gilliam 説
- ・「長文の説明」(マクロスティコス・エクテシス): アンティオキア第四信条に付された長い説明文⁶⁵
 - 発表者もこの指摘を説得的だと考えるが、その前に前提となる教会史的状况を整理する

☆教会史的状况①

・ニカイア公会議(325)の後、コンスタンティヌス帝はニコメディアのエウセビオスやカピサレイアのエウセビオスなどの従属説の立場を重視する姿勢に。帝没(337年)後、アンティオキアにおいて黄金八角大聖堂⁶⁶が奉献された際にエウセビオス派が集まって教会会議を開き、アタナシオス排斥の確認などと併せてアンティオキア第二信条(献堂式信条)を採択(341年)⁶⁷。この傾向に反対する西方の司教たちとの一致を目指し、東の皇帝コンスタンティウス2世が主導し開いた343年のセルディカ教会会議は決裂に至る⁶⁸。そこで344年、アンティオキアに残っていた人々が西方との一致回復のためアンティオキア第四信条および「長文の説明」を起草した。345年のアンティオキア教会会議でコンスタンティウスに承認され、使節を通してローマに届けられたが、西方司教たちによりニカイア信条で十分

⁶⁵ 本文は以下の二文献で、第四信条に直接続く形で伝承される。アレクサンドリアのアタナシオス『イタリアのアリミヌムとイサウリアのセレウキアでの両教会会議について』(*De synodis Arimini in Italia et Seleucia in Isauria*) 26.1-9, ソクラテス『教会史』II. 19. 3-27. 日本語訳として小高毅『原典 キリスト教思想史 2 ギリシア教父』232-6頁のものがある。本論でも参考にしたが、適宜訳を改めた。

⁶⁶ 326年に建設開始され、コンスタンティヌス帝没後も建築が進められた、皇帝権威と深く結びついた大聖堂。Mayer and Allen 2012, 68-80.

⁶⁷ 本文は同じくアタナシオス『両教会会議について』23.2-10, ソクラテス『教会史』II. 10. 10-18.

⁶⁸ 東方の主教たちは隣市のフィリップポリスへ移動して独自に信条を採択し人事的決定を下した。これをフィリップポリス会議ということもあるが、本発表ではセルディカ東方会議と呼び、残留した西方の司教たちのそれをセルディカ西方会議と呼ぶ。

であるとされ成果を結ばなかった

☆「長文の説明」との類似

- ・「長文の説明」は、アンティオキア第四信条に直接続く、その説明文書
- ・そもそものアンティオキア第四信条は、アンティオキア第二信条（献堂式信条）と類似しているが、従属論への批判を受けての？ 修正が確かに認められる

* 父に（子のものとは異なる）神的本質（ウーシア）が存在すると解釈されかねない文言⁶⁹を削除、ニカイア信条と共通する表現「光からの光」の追加⁷⁰

* 「神と人の仲介者」[Iテモ 2:5]「我々の信仰の使者（使徒）」[ヘブ 3:1]⁷¹などといった従属論に合致する「子」論的聖句を削除

* 「ヒュポスタシス（位格、自立存在）の点で三者、シュンフォーニア（調和、和声）の点で一者」⁷²という文言を削除

* 世の終わりにおいて子が父の右に座している⁷³という告白を追加する

・「長文の説明」は、受け入れられない見解を一つずつ特定し、理由を挙げて排斥するという方法を採用（後述）。これらはアンティオキア第四信条を起草した穏健エウセビオス派と、その宛先である西方ニカイア派教会の双方にとり共通に排斥すべきものを挙げることで引き算的に合意へ近づく戦略と考えられる

※三一について最も簡潔な文言：「キリストは……初めから完全な方であり、すべての点で御父に相似」⁷⁴「父と子と聖霊を信じ、父を神と呼び、子を神と呼ぶが、このお二方を二人の神々とは呼ばず、我々は神性の一つの榮譽と御国の完全な唯一の調和を信仰告白する」⁷⁵

→信じるのは三者、父も子も神と呼び、その榮譽と御国は一つのものとして調和

◆Gilliam は Amelungk を踏まえつつキリスト論（三一論の中の子に関する論）の類似を指摘

- ・ 例えば：発音された言葉

⁶⁹ 『両教会会議について』 23. 3. 6: 「神性の本質と父の意志、力、栄光の寸分たがわぬ似姿」
“τῆς θεότητος οὐσίας τε καὶ βουλῆς καὶ δυνάμεως καὶ δόξης τοῦ πατρὸς ἀπαράλλακτον εἰκόνα.” この部分はのち相似派によって改めて重視された。cf. 37.2.

⁷⁰ 同 26. 1. 2: “φῶς ἐκ φωτός.”

⁷¹ 同 23. 4: “μεσίτην θεοῦ καὶ ἀνθρώπων”; “ἀπόστολόν τε τῆς πίστεως ἡμῶν.”

⁷² 同 23. 6: “ὡς εἶναι τῇ μὲν ὑποστάσει τρία, τῇ δὲ συμφωνίᾳ ἓν.”

⁷³ 同 26. 2: “οὐ ἡ βασιλεία ἀκατάπαυστος οὕσα διαμένει εἰς τοὺς ἀπείρους αἰῶνας· καθέζεται γὰρ ἐν δεξιᾷ τοῦ πατρὸς οὐ μόνον ἐν τῷ αἰῶνι τούτῳ, ἀλλὰ καὶ ἐν τῷ μέλλοντι.”

⁷⁴ 同 26. 6. 3: “ἄνωθεν τέλειον αὐτὸν καὶ τῷ πατρὶ κατὰ πάντα ὅμοιον εἶναι πεπιστεύκαμεν”

⁷⁵ 同 26. 9. 3: “πιστεύοντες οὖν εἰς τὴν παντέλειον τριάδα τὴν ἀγιωτάτην, τουτέστιν εἰς τὸν πατέρα καὶ εἰς τὸν υἱὸν καὶ εἰς τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον, καὶ θεὸν μὲν τὸν πατέρα λέγοντες, θεὸν δὲ καὶ τὸν υἱόν, οὐ δύο τούτους θεούς, ἀλλ’ ἐν ὁμολογοῦμεν τῆς θεότητος ἀξίωμα καὶ μίαν ἀκριβῆ τῆς βασιλείας τὴν συμφωνίαν”

- * 偽イ・マグ 8.2: 「唯一の神、〈全能者にして〉ご自身をその方の子イエス・イリスト——その方の御言葉である〈が、語られたものではなく本体的な存在、というのもおしゃべりの中で音節化された音声ではなく神的な働きの生み出された本体であるから……—〉を通じて明らかにされる方がおられることを」⁷⁶
- * 「長文の説明」: 「また、我々は彼らに加えて以下のような者たちを忌み嫌い排斥する、(御言葉は) 単なる実体のない神の言葉で、別のもののうちに存在を有した、人によって時としては発音された言葉 (προφορικόν) とか、また内在的な言葉とか言われるものであると、欺きの告発をする者たちを」⁷⁷
→語彙ではなく主張内容の一致
- ・ほかに……従属的傾向やそれと併存する父と子の同等性への言及
 - * 「長文の説明」: 「(イエス・キリストは) 神である御父の下に置かれているにもかかわらず、代々に先立って神から生まれた本性に即して完全かつ真の神」⁷⁸
 - * 偽イ・タル 5.2: 「したがって一方が下に置き、全てにおいて全てであられる神で、もう一方がその方の下に〔万物が〕置かれた方、万物と共に下に置かれている方なのです (あるいは: 「したがって一方が……服従させる……神で、もう一方が……かの方の下に〔万物が〕服従した方、万物と共に服従しておられる神なのです……」)⁷⁹
- 同・エフェ 7.2: 「また医師〈である主にして私たちの神イエス・キリスト、代々に先立つ独り子にして御言葉)」⁸⁰
- ・論拠はそれほど強くない? ……発表者による補足
 - * 「長文の説明」: 「(父が唯一の生まれざる方であるからといって) そのためにキリストも代々に先立つ神であることを否定することもない。サモサタのパウロスの追従者たちがこのような者たちである (=父のみを神と認め子を初めからの神とみなさない)。彼らは、〔キリストは〕本性によって裸の人間であり、人間化したあとに、進歩によって、後で神とされたと言うのである」⁸¹

⁷⁶ Gilliam 2017, 120-1. マグ 8. 2: “ὅτι εἷς θεός ἐστιν ὁ παντοκράτωρ, ὁ φανερώσας ἑαυτὸν διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ, ὃς ἐστιν αὐτοῦ λόγος, οὐ ῥητός, ἀλλ’ οὐσιώδης· οὐ γὰρ ἐστιν λαλιᾶς ἐνάρθρου φώνημα, ἀλλ’ ἐνεργείας θεϊκῆς οὐσία γεννητή”

⁷⁷ 『両教会会議について』26. 5: “Βδελυσσόμεθα δὲ πρὸς τούτους καὶ ἀναθεματίζομεν καὶ τοὺς λόγον μὲν μόνον αὐτὸν ψιλὸν τοῦ θεοῦ καὶ ἀνύπαρκτον ἐπιπλάστως καλοῦντας, ἐν ἑτέρῳ τὸ εἶναι ἔχοντα, νῦν μὲν ὡς τὸν προφορικὸν λεγόμενον ὑπὸ τινων, νῦν δὲ ὡς τὸν ἐνδιάθετον”

⁷⁸ 同 26. 4: “εἰ καὶ ὑποτέτακται τῷ πατρὶ καὶ τῷ θεῷ, ἀλλ’ ὁμως πρὸ αἰώνων γεννηθέντα ἐκ τοῦ θεοῦ θεὸν κατὰ φύσιν τέλειον εἶναι καὶ ἀληθῆ”

⁷⁹ タル 5. 2: “οὐκοῦν ἕτερός ἐστιν ὁ ὑποτάξας καὶ ὁ ὢν τὰ πάντα ἐν πᾶσιν, καὶ ἕτερος, ᾧ ὑπετάγη, ὃς καὶ μετὰ πάντων ὑποτάσσεται.”

⁸⁰ Gilliam 2017, 124ff. エフェ 7.2: “ἔχομεν ἰατρὸν καὶ τὸν κύριον ἡμῶν θεὸν Ἰησοῦν τὸν Χριστόν, τὸν πρὸ αἰώνων υἱὸν μονογενῆ καὶ λόγον”

⁸¹ 『両教会会議について』26. 4: “οὔτε …… διὰ τοῦτο ἀρνούμεθα καὶ τὸν Χριστὸν θεὸν εἶναι πρὸ αἰώνων, ὁποῖοί εἰσιν οἱ ἀπὸ Παύλου τοῦ Σαμοσατέως ὑστερον αὐτὸν μετὰ τὴν ἐνανθρώπησιν ἐκ προκοπῆς τεθεοποιῆσθαι λέγοντες τῷ τὴν φύσιν ψιλὸν ἀνθρώπων

*偽イ・エフェ 7:2:「代々に先立つ独り子にして御言葉、後で乙女マリアから〔生まれ〕人間となられた方」⁸²

→御子の先在性と、その受肉における神性および人性の関係を「後で」を軸として組み合わせて語る

*アンティオキア第四信条:「我々は信じる、その(=神、父の) 独り子なる子、我らが主イエス・キリスト、代々に先立って父から生まれた方.....天に迎え上げられ父の右に座られ代々の終極⁸³に生者と死者を裁きその業に応じて各々に報いるために来られる。その御国は無限の代に続く」⁸⁴

*偽イ・マグ 6.1:「(司祭たちと輔祭たち、すなわち) イエス・キリスト、代に先立って神〔のもとにあり、終わりに現れた方〕〈から生まれた御言葉なる神、独り子なる子、そして代々の終極にも同じ方として在り続けられる方—というのも「その御国に終わりは無い」、と預言者ダニエルが言っているのだから—) への奉仕を信任されている人々」⁸⁵

同マグ 11.3:「遣わした方に向かい 天へ上りその右に座られ代々の終極に「父の栄光とともに」〔マタ 16:27〕生者と死者を裁き各々の業に基づいて報いるため来られる」

cf. アンティオキア第二信条(献堂式信条):「また唯一の主イエス・キリスト、その子にして独り子なる神を、その方をして万物〔は成った〕、あらゆる代々に 先立って父から生まれた方……再び栄光と力とともに〔マコ 13:26〕生者と死者を裁きに來られる方」⁸⁶

→真イが神およびキリストに基づく聖職位階の權威を主張する箇所、長いキリスト論的挿入を行う

→ダニエル、とある箇所は、Funkの指摘する通り、ダニエル書(2:44, 7:14, 27)に

γεγονέναι.”

⁸² 直前の引用の続きなので、合わせて訳すと、「〈私たちは私たちの主なる神〉 イエス・キリスト(、代々に先立つ独り子にして御言葉、後で乙女マリアからの人間となられた方)をも医師として持つ)」。エフェ 7:2: “τὸν πρὸ αἰώνων υἱὸν μονογενῆ καὶ λόγον, ὑστερον δὲ καὶ ἄνθρωπον ἐκ Μαρίας τῆς παρθένου”

⁸³ 代々の終極に(ἐπὶ συντελείᾳ τῶν αἰώνων)という表現はヘブ 9.26に出るが、これはキリストの受肉と贖罪のときを示す「終わりの時」であって、アンティオキア第四信条と偽イが用いるような再臨のときではない。

⁸⁴ 『両教会会議について』 26. 1: “καὶ εἰς τὸν μονογενῆ αὐτοῦ υἱὸν τὸν κύριον ἡμῶν Ἰησοῦν Χριστόν, τὸν πρὸ πάντων αἰώνων ἐκ τοῦ πατρὸς γεννηθέντα ἀναληφθέντα εἰς οὐρανὸν καὶ καθεσθέντα ἐκ δεξιῶν τοῦ πατρὸς καὶ ἐρχόμενον ἐπὶ συντελείᾳ τοῦ αἰῶνος κρῖναι ζῶντας καὶ νεκροὺς καὶ ἀποδοῦναι ἐκάστω κατὰ τὰ ἔργα αὐτοῦ, οὗ ἡ βασιλεία ἀκατάπαυστος οὕσα διαμένει εἰς τοὺς ἀπείρους αἰῶνας”

⁸⁵ 真イ・マグ 6.1: “πεπιστευμένων διακονίαν Ἰησοῦ Χριστοῦ ὃς πρὸ αἰώνων παρὰ πατρὶ ἦν καὶ ἐν τέλει ἐφάνη.”; 偽イ・マグ 6.1 “πεπιστευμένων διακονίαν Ἰησοῦ Χριστοῦ, ὃς πρὸ αἰώνων παρὰ τῷ πατρὶ γεννηθεὶς ἦν λόγος θεός, μονογενῆς υἱός, καὶ ἐπὶ συντελείᾳ τῶν αἰώνων ὁ αὐτὸς διαμένει· τῆς γὰρ βασιλείας αὐτοῦ οὐκ ἔσται τέλος, φησὶν Δανιὴλ ὁ προφήτης”

⁸⁶ スミュ 3.5-6. マルコの方の引用と、「代の終極において」を用いている。

類似の文言があるものの一致するのはルカ 1:33 であってダニエル書ではない⁸⁷。
Gilliam は本箇所をもって子を神と言明している箇所として引用する⁸⁸が、私見では聖書引用を膨らませているという仕掛けでより古い・正統的伝統に訴えつつ第四信条に近い文言を盛り込んだ箇所（信条と類似した文言がそのままトラヤヌス帝代の書簡に現れていたら怪しいが、核になる聖書箇所があれば不自然さは減る）→真イの「終わり（ἐν τέλει）に現れた」は受肉を指すと思われ、アンティオキア第四信条にも「終わりの日に（ἐπ' ἐσχάτων）人間となられて聖なる乙女より生まれ」云々という箇所がもちろんあるが、偽イはさらに終末に関する言明へと変えている。このことで聖職の権威自体も終末論的基礎を与えられる

・箴言 8:22 の理解

* 「長文の説明」：「主は、その御業のためのその道の初めに、私（知恵）を造られた」[箴 8:22] とご自身について言っておられる方を畏怖の念をもって信じ、この方を通して創られたり造られたりした被造物と同じように、この方が造られたと我々は考えない。……実に、独り子なる子は唯一の方として、唯一の方法で、真正かつ真実に生まれたことを、聖書は我々に教えているのである」⁸⁹

* 偽イ・タル 6.4 「それでこのような方がどうして裸の人間、マリアから存在の端緒を得た者で、御言葉なる神・独り子ではないというのか？ 「初めに言葉があった。言葉は神のもとにあった。言葉は神であった」[ヨハ 1:1]。「主はその御業のためのその道の初めに、私（知恵）を造られた」[箴 8:22]。「代に先立って私を据え、あらゆる山々の前に私を生まれた」[箴 23:25]」⁹⁰

※箴言 8:22 は主＝御父が「私」＝知恵＝御言葉＝御子を「造った」と解せる聖句であるため、アレイオス派論争で非常な混乱を招いた。これを文字通り御子＝被造物の啓示と解釈するのを拒む場合、いくつかの方法が取られた

- ① 「初めに」を重視して「造った」を万物の創造と異なるレベルに置き、「生んだ」と読み替える
- ② 「造った」を万物の創造と異なるレベルに置き、「生んだ」とは別の含意（永続的な存在性の付与）を与える（アンティオキアのメレティオス）

⁸⁷ 同じ箇所を同じ文脈で引用する者にカイサレイアのエウセビオス『マルケッロス駁論』2.1.6 があり、ルカ福音書の箇所が続いてダニエルの名前を出しつつダニエル書を引用している。

⁸⁸ Gilliam 2017, 77.

⁸⁹ 『両教会会議について』26.8.2-3: “πιστεύοντες δὲ ἐμφόβως καὶ τῷ περὶ ἑαυτοῦ λέγοντι· «κύριος ἔκτισέ με ἀρχὴν ὁδῶν αὐτοῦ εἰς ἔργα αὐτοῦ», οὐχ ὁμοίως αὐτὸν τοῖς δι' αὐτοῦ γενομένοις κτίσμασιν ἢ ποιήμασι γεγενῆσθαι νοοῦμεν. …… μόνον γὰρ καὶ μόνως τὸν μονογενῆ υἱὸν γεγενῆσθαι γνησιῶς τε καὶ ἀληθῶς διδάσκουσιν ἡμᾶς αἱ θεῖαι γραφαί.”

⁹⁰ “πῶς οὖν ὁ τοιοῦτος ψιλὸς ἄνθρωπος καὶ ἐκ Μαρίας ἔχων τὴν ἀρχὴν τοῦ εἶναι, ἀλλ' οὐχὶ θεὸς λόγος καὶ υἱὸς μονογενῆς; ἐν ἀρχῇ γὰρ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος. καὶ ἐν ἄλλοις· Κύριος ἔκτισέ με ἀρχὴν ὁδῶν αὐτοῦ εἰς ἔργα αὐτοῦ· πρὸ τοῦ αἰῶνος ἔθεμελίωσέ με, πρὸ δὲ πάντων βουνῶν γεννᾶ με.”

- ③ギリシア語諸訳（アクィラ、シュンマコス、テオドティオン）を用いて「造った」の含意を明らかにしようと試みる（カイサレイアのエウセビオス『教会神学』）
- ④「私」をキリストの受肉における人間性（人性）と解する（アンブロシウス、ナジアンゾスのグレゴリオス）
- ⑤「私」＝知恵を御言葉＝御子と同一視することを避ける（ヨアンネス・クリュソストモス）
- ⑥『箴言』の教理に関する証言可能性を否定する（モプスエスティアのテオドロス）
→①～③は同一方向の微妙な差異で、④と⑤⑥はそれから離れつつ互いに異なる道を行く。ここで「長文の説明」と偽イは①で共通

◆発表者の意見では、長文の説明との類似にはより根本的な要素が認められる。即ち、前述した「受け入れられない見解を一つずつ特定し、理由を挙げて排斥するという方法を採用」手法。さらに個々の謬説を予め簡潔に並べておく書き方：

* 「長文の説明」：「御子は存在しないものから作られたとか、神からではなく、他の実体から作られたという者ら、また、かつて存在しなかった時があったとかいう者たちを、公同の、聖なる教会とは異質の縁もゆかりもない者とみなす。また同様に、三つの神々が存在するとか、キリストは神ではないとか、代々に先立ってキリストご自身も神の御子も存在しなかったとか、御子とか聖霊とかは御父ご自身のことであるとか、御父が御子を産んだのはご自分の意志と決意によるのではないとか言う者たちを、聖なる公同の教会は排斥する。/実に、存在しないものから御子は〔作られた〕と言うことは安全なことではないし、……」⁹¹（以下、下線を引いた両箇所が対応するのと同じ仕方で、3-8節で順序通り項目ごとの論駁が続く）

* 偽イ：「サタンの奉仕者のなかのある連中が、あなた方を動揺させることをもくろんでいることを知りました。ある者は、イエスは見せかけにより生まれ見せかけにより十字架につけられ見せかけにより死んだと、ある者は、〔イエスは〕造物主の子ではないと、ある者は、〔イエスは〕まさに万物の神その方だと、ある者は、〔イエスは〕単なる人間だと、またある者は、肉体そのものは復活せず、〔飲食物を〕享受できない生を生き、歩まねばならない、なぜならそれ以上損壊されえない者たちにとって、これこそ善の極致だから、と言って。……彼（パウロ）のことを思い出して、全き仕方で知りなさい、主イエスは真

⁹¹ 『両教会会議について』 26. 2-3: “Τοὺς δὲ λέγοντας ἐξ οὐκ ὄντων τὸν υἱὸν ἢ ἐξ ἑτέρας ὑποστάσεως καὶ μὴ ἐκ τοῦ θεοῦ καὶ ὅτι ἦν χρόνος ποτὲ ἢ αἰὼν, ὅτε μὴ ἦν, ἀλλοτριούς οἶδεν ἢ καθολικὴ καὶ ἀγία ἐκκλησία. ὁμοίως καὶ τοὺς λέγοντας τρεῖς εἶναι θεοὺς ἢ τὸν Χριστὸν μὴ εἶναι θεὸν ἢ πρὸ τῶν αἰώνων μῆτε Χριστὸν μῆτε υἱὸν αὐτὸν εἶναι θεοῦ ἢ τὸν αὐτὸν εἶναι πατέρα καὶ υἱὸν ἢ ἅγιον πνεῦμα ἢ ἀγέννητον υἱὸν ἢ ὅτι οὐ βουλήσει οὐδὲ θελήσει ἐγέννησεν ὁ πατὴρ τὸν υἱὸν ἀναθεματίζει ἢ ἀγία καὶ καθολικὴ ἐκκλησία. 3. Οὔτε γὰρ ἐξ οὐκ ὄντων τὸν υἱὸν λέγειν ἀσφαλές, ……”

実にマリアから生まれたのです」⁹²（下線は発表者。以下、3-7章で順序通り項目ごとの論駁が続く。I.3『タルソスの人々への手紙』を参照のこと）

→「長文の説明」（発表者の意見では、アンティオキア第四信条も含めて）が偽イの重要な典拠であるという仮説は説得的で、しばしば指摘されているカイサレイアのエウセビオス（339没）との類似よりも重要⁹³。Gilliamはそこから偽イグナティオスの成立を書簡集の成立を344年から数年以内にアレオス派によってなされたものだと結論付ける⁹⁴

⇒異議

・元資料として用いたことから、数年以内の成立を結論付けるのは論理の飛躍。その妥当性を判断するためには、「長文の説明」の文書利用史を明らかにする必要がある

☆教会史的状況②

・「長文の説明」による合同が失敗した後、西方の皇帝コンスタンスが篡奪者により殺害されると（350）、シルミウムにエウセビオス派（反アタナシオス派）の主教たちが集まり、フォティノス⁹⁵の排斥で一致し、アンティオキア第四信条を再び宣言して「～と主張する者がいれば、アナテマ」式の異端排斥を27箇条採択した⁹⁶。その後コンスタンティウス2世が西方の統治権をも確立した（353年）ことから新たな教会史的状況が生まれる。357年に主に西方の司教たちにより第二シルミウム教会会議が開催され、新たな信条を作成して議論を収束させようとする皇帝及びそれに同調する一派と、それに反対する一派が対立し、前者の主導でシルミウム第二信条が作成されそこに「ウーシア」「ホモウーシオス」「ホモイウーシオス」という語の使用そのものを禁止する条項が盛り込まれる（＝シルミウム第二信条）

・前者は所謂「相似派」（「ホモイオス派」）、後者は所謂「相似本質派」（「ホモイウーシオス派」）と呼ばれる集団

・「長文の説明」の利用史において重要な後者の動きを追う。まずシリアのラオディケイア主教ゲオルギオス（在位342以前-360頃）は、シルミウム第二信条採択を受けてアンキュ

⁹² タル 2.1, 3.1: “Εγνων, ὅτι τινὲς τῶν τοῦ Σατανᾶ ὑπηρετῶν ἐβουλήθησαν ὑμᾶς ταράξαι· οἱ μὲν, ὅτι Ἰησοῦς δοκῆσει ἐγεννήθη καὶ δοκῆσει ἐσταυρώθῃ καὶ δοκῆσει ἀπέθανεν· οἱ δέ, ὅτι οὐκ ἔστιν υἱὸς τοῦ δημιουργοῦ· οἱ δέ, ὅτι αὐτός ἐστιν ὁ ἐπὶ πάντων θεός· ἄλλοι δέ, ὅτι ψιλὸς ἄνθρωπός ἐστιν· ἔτεροι δέ, ὅτι ἡ σὰρξ αὐτῆ οὐκ ἐγείρεται καὶ δεῖ τὸν ἀπολαυστικὸν βίον ζῆν καὶ μετεῖναι· τοῦτον γὰρ εἶναι πέρας τῶν ἀγαθῶν τοῖς μετ’ οὐ πολὺ φθαρησομένοις. Οὐ μνημύμενοι πάντως γινώσκετε, ὅτι Ἰησοῦς ὁ κύριος ἀληθῶς ἐγεννήθη ἐκ Μαρίας,”

⁹³ Lightfoot, II.1. 260-1, Gilliam 2017, 143ff., Brennecke 2018, 256-261. 偽イがカイサレイアのエウセビオスの著作を利用したのは確かであり、従属と同等の間で揺れる神学や、反サベリウスの傾向も共通しているが、いずれも『長文の説明』により明瞭に一致しているように思われる。

⁹⁴ Gilliam 2017, 225.

⁹⁵ 376没。アンキュラのマルケッロスの追隨者にしてシルミウム主教。サベリウス主義者とみなされ、336年に追放されたがセルディカ西方会議（343）で復権していた。

⁹⁶ 異端宣告文を含めてしばしばシルミウム第一信条と呼ばれる。

ラ主教バシレイオス（在位 336-360 頃）をはじめとする人々に書簡を宛て、翌 358 年にアンキュラ教会会議の開催をみた⁹⁷。この会議にはコンスタンティノポリス主教マケドニオス、セバステイア主教エウスタティオスなどが参加した。その結果を諸都市に伝達する書簡がエピファニオス『パナリオン』に収録されている：

「私たちは祈っております、まるで火の中におけるように信仰のため真ん中でなされた試練による教会的信条の検討の後で、そしてコンスタンティノポリスでマルケッロスのゆえに作られた議事録⁹⁸の後で、またアンティオキアにおける教会堂の献堂式の際に催された会議での信仰箇条⁹⁹の後で、またセルディカでの議事録とそこで再び花開いた信条¹⁰⁰の後で、そしてさらにシルミウムでフォティノスのゆえに作られた議事¹⁰¹の後で、さらにまた信仰についてそれぞれの条項においてセルディカで東方から離れた人々によって問われたので私たちが申し開きしたところの諸々の説明（ロギスモイ）¹⁰²の後では、もはや口を閉ざすことを、そして、東から西までの教会が私たちの主人コンスタンティウスの敬虔な御国により合同されながら、躓きの石が投げ込まれている以上は、平和を保ちかつ神への奉仕に身を捧げることを」¹⁰³

「以下のこと以外については、先述のアンティオキアにおける〈教会会議〉、また献堂式で、またセルディカで提示された信条——それをシルミウム教会会議が受け入れたのだが——と、そしてそこでの諸々の説明に〔賛同した〕、聖三位に対する公同教会の信仰を精確に分節しようと望んで、しかし前述したとおりの新奇な教説¹⁰⁴の形態に対しては、ただ聖霊が許す限りにおいて解説しつつ」¹⁰⁵

⁹⁷ Hanson 1988, 348-51.

⁹⁸ 336 年にアレオスの追放とサベリウス主義者とみられたアンキュラのマルケッロスを追放した会議。以下本書簡に対する註は Hanson, loc.cit. および Williams, 444-5 に基づく。

⁹⁹ 献堂式信条のこと。

¹⁰⁰ 343 年のセルディカ教会会議のこと。信条については、Williams によればポワティエのヒラリウス『会議について』(De Synodis) 34 に掲載されているセルディカ東方信条なるものである。しかしこれはアンティオキア第四信条の忠実なラテン語訳であるように思われる。

¹⁰¹ 351 年のシルミウム会議で宣言されたアンティオキア第四信条および異端宣告文のこと

¹⁰² 「長大な説明」のこと。本文を参照。

¹⁰³ 『パナリオン』 73.2.2-3: “Εὐχόμεθα μὲν μετὰ τὴν ὡς ἐν πυρὶ τοῖς ἐν μέσῳ γεγεννημένοις ὑπὲρ τῆς πίστεως πειρασμοῖς βάσανον τῆς ἐκκλησιαστικῆς πίστεως καὶ <μετὰ> τὰ ἐπὶ τῆς Κωνσταντίνου πόλεως διὰ Μάρκελλον γεγεννημένα καὶ μετὰ τὴν ἔκθεσιν τῆς πίστεως ἐν τῇ συνόδῳ συγκροτηθεῖσιν ἐπὶ τοῖς ἐγκαινίοις τῆς ἐν Ἀντιοχείᾳ ἐκκλησίας καὶ μετὰ ταῦτα κατὰ Σαρδικὴν καὶ τὴν ἐκεῖ αὐθις ἀνθήσασαν πίστιν καὶ ἔτι μετὰ τὰ ἐν Σιρμίῳ ἐπὶ Φωτεινῶ γεγεννημένα, ἔτι μὴν καὶ λογισμοῦς, οὓς ἐφ’ ἐκάστῳ περὶ τῆς πίστεως κεφαλαίῳ ἐπερωτηθέντες παρὰ τῶν ἐν Σαρδικῇ πρὸς τὴν ἀνατολὴν διεστώτων ἐξεθέμεθα, ἡρεμῆσαι λοιπὸν καὶ ἐνωθείσης ἐν τῇ εὐσεβεῖ βασιλείᾳ τοῦ δεσπότου ἡμῶν Κωνσταντίου τῆς ἀπὸ ἀνατολῆς ἕως δυσμῶν ἐκκλησίας, ἐκβεβλημένων τῶν σκανδάλων, εἰρηνεύειν τε καὶ ταῖς λατρείαις τοῦ θεοῦ προσανέχειν.” 角括弧は Holl による追加。次の引用においても同様。

¹⁰⁴ 省略した 5 節で仄めかされている、アンティオキア主教エウドクシオスと、彼の庇護を受けたアエティオスによる、異本質（ヘテルーシオス、父と子は本質において異なる）の教説を指す。

¹⁰⁵ 同 73.2.10: “ὅσον ἐπὶ τοῖς λοιποῖς * τῇ ἐν Ἀντιοχείᾳ ὡς προέφαμεν <συνόδῳ>, ἐκτεθείσθαι

→「説明（ログスモイ）」と表現された「長文の説明」が、他のアンティオキア第二信条＝献堂式信条、アンティオキア第四信条、シルミウムでの異端宣告文とともに現れてその末尾を飾り、それらの意図を説明する文書として受け入れられている。またそこに含まれている「初めから完全な方であり、すべての点で御父に類似した方」¹⁰⁶がアンキュラのバシレイオスの教説（もっとも厳密な意味での相似本質説）に合致することも指摘される

◎「アンティオキアの献堂式での信条」はどの信条か？

・ Steenson はこの書簡に出る「献堂式信条」とは一般に考えられているような第二信条ではなく、むしろ第四信条であると、アンキュラのバシレイオスの首尾一貫した信条観（第二信条の思想と第四信条・「長文の説明」の思想が無視しえない程度に異なっていることを指している？）と 341-358 年に第四信条がしばしば参照されたこと、351 年のシルミウム教会会議で用いられたのが第二信条ではなく第四信条であったことから論証した

・ Hanson は Steenson の博士論文自体を高く評価しつつ、古代の人々が我々の想定するほど一貫性・厳密性を追い求めていなかったこと、第四信条は献堂式の際に採択されたものではなく、アンティオキアに残った別のグループによるものであることから、ここで示されているのは第二信条の他にありえないと断言する。また Leinhard が提出した、アンキュラのバシレイオスの書簡中の「完全な方からの完全な方」が第四信条に存在せず第二信条に現れる文言であることも傍証として挙げる¹⁰⁷

・ しかし議論はそれで決着するだろうか。2 点目から Hanson の説に反論すれば、アタナシオス『両教会会議について』はアンティオキア第三信条（第四信条とほとんど同じ）を掲載するにあたり、あたかも献堂式のあとに同じグループにより採択されたような書き方をしている¹⁰⁸。古代人の非厳密性を持ち出すならば、実際にそうではない信条が献堂式での信条として伝承されていた蓋然性もまた一概に棄却しえないことになるのでは¹⁰⁹。実際、二つ目の引用文ではアンティオキア～シルミウムまでが一つの信条

τε πίστει τῇ ἐν τοῖς ἐγκαινίοις, ἀλλὰ καὶ ἐν τῇ Σαρδικῇ, ἣν ἀνείληφεν ἡ ἐν Σιριμίῳ σύνοδος, καὶ τοῖς ἐκεῖθεν λογισμοῖς, διαρθρώσειν ἀκριβῶς <βουλόμενοι> τὴν εἰς τὴν ἁγίαν τριάδα τῆς καθολικῆς ἐκκλησίας πίστιν, πρὸς δὲ τοῦτο ὡς προέφημεν τῆς καινοτομίας τὸ εἶδος, μόνον ὡς ἐνεδίδου τὸ πνεῦμα ὑπαγορεύσαντες.”

¹⁰⁶ 『両教会会議について』 26. 6: “ἀνωθεν τέλειον αὐτὸν καὶ τῷ πατρὶ κατὰ πάντα ὅμοιον”

¹⁰⁷ Hanson 1988, 352, n. 17.

¹⁰⁸ 「以上を献堂式で行い、しかし完全な形で書かれなかったとみなし、気まぐれな心持で、数か月後に再び信仰に関する別の文書を宣言した」“ταῦτα πράξαντες ἐν Ἀντιοχείᾳ τοῖς Ἐγκαινίοις, νομίσαντες δὲ μὴ τελείως γεγραμέναι, ῥεμβομένην δὲ τὴν διάνοιαν ἔχοντες αὐθις πάλιν συντιθέασιν ἄλλο γράμμα δῆθεν περὶ πίστεως μετὰ μῆνας ὀλίγους”¹⁰⁹

¹⁰⁹ 実際、ギリシア語圏で教会法としての実効性を持つ地方教会会議規定の一つ「アンティオキア教会会議規定」は、シリア語・ラテン語訳では 341 年の「献堂式」教会会議での規定とされているものの諸々の証拠から斥けられ、現在では 330 年ごろのアンティオキア教会会議での

を指しているように見えるし、「セルディカでの議事録とそこで再び花開いた信条」(ταῦτα κατὰ Σαρδικὴν καὶ τὴν ἐκεῖ αὐθις ἀνθήσασαν πίστιν) という表現と、ポワティエのヒラリウスが掲載するセルディカ東方会議での信条がアンティオキア第四信条であったことを考えれば、「献堂式での信条」が排他的に第二信条だけを指しているのだろうか、という疑問を発表者は抱く。この問題は、後述する 359 年セレウキア教会会議以降の展開で重要になる

→いずれにせよ、このアンキュラ教会会議(358)を担ったグループにとって、アンティオキア第二信条、アンティオキア第四信条、シルミウムでの異端宣告文、「長文の説明」という一連の諸信条を保守することが、新たな信条の採択やホモウーシオス/ホモイウーシオス使用禁止よりも重要であったというのが重要なポイント

・バシレイオスに連なるグループは、359年8月28日に(初めニコメディア、次いでニカイア、次いでタルソスで開催が検討された末選ばれた)イサウリアのセレウキアで開催された東方主教たちの教会会議で主導権を握りえた。この会議ではカイサレイアのアカキオスらが率いたグループ(相似派)が新信条作成を主張したが、ラオディケイアのゲオルギオスやキュジコスのエレウシオスが率いる多数派(彼らとつながりのあるマケドニオスやアンキュラ主教バシレイオスは欠席)は、同一本質(ホモウーシオス)という文言を除きニカイア信条をほとんど承認して分裂した。最終的に、後者の多数派の指導者のひとりタルソス主教シルヴァノスが「大声で叫び、新しい信条の公布を宣言する必要はなく、むしろアンティオキア献堂式会議で宣言されたものが効力を持つので十分だとした」¹¹⁰：会議では相似派が退出し、「アンティオキアでの信条」に押印・承認

→Stenson・Hansonの議論を踏まえて、ソクラテスの記述における「献堂式信条」とは？排他的に第二信条のみを指すのか、それとも第四信条その他を含むのか(あるいは第四信条そのものを指すのか)。ソクラテス自身5世紀に執筆しており、この箇所の特長は相似本質派に属しその内部資料を用いたヘラクレイアのサビノスの『教会会議資料集成』(Συναγωγή τῶν συνοδικῶν)であると考えられるが、それは散逸してしまい現存しない。このためソクラテスの勘違いも考慮に入れなければならない。しかしもしかしたらこのこと自体はさほどの問題ではないのかもしれない。もしも彼らがアンキュラのバシレイオスと志向を共有していたのなら、アンティオキア第二信条を掲げることで、「長文の説明」を含む諸々の文書において表明された信仰を表現していたと考えられる¹¹¹

規定と推測されている。ただし「献堂式」会議への結び付けは、エウセビオス派⇨相似派的の発想から出たものと考えられるので、380年以前にギリシア語版ですでになされていたと推測される。そうだとすれば、信条にせよ規定にせよ有名な教会会議に結び付けることはあってもおかしくないように思える。Ohme 2012, 44.

¹¹⁰ ソクラテス『教会史』II.39.19: “μὴ χρῆναι λέγων καινὴν ὑπαγορεύειν πίστεως ἔκδοσιν, ἀλλὰ τὴν ἤδη πρότερον ἐν Ἀντιοχείᾳ τοῖς ἐγκαινίοις ὑπαγορευθεῖσαν ὀφείλειν κρατεῖν”

¹¹¹ もしも類推が許されるとすれば、現代に「ニカイア信条」といった場合「コンスタンティノポリス信条」により敷衍された信仰を表現する可能性があるが、それと同じような事態を発表者は

⇒Gilliam 説「344年から数年以内」は早計。むしろ 350年代後半にも「長文の説明」が引き合いに出された可能性を視野に入れるべき

※そもそも、345年に一度「失敗」した文書を、その後すぐ偽造する文書に利用するメリットは？

II.2. eirenicon 説と Gilliam による批判

・問題：父と子に関する従属論と同等論の併存、当然と言えば当然だが、神学用語としてのウーシア¹¹²もヒュポスタシス¹¹³も用いない

・Lightfoot: 「おそらく私たちは彼（偽イ）を、教会会議に関する目的をもって、そしてこの原始教会の教父の名において提起された目標と共に、平和提議（eirenicon）として、あらゆる立場の話の分かる人々なら合意点を見出せるだろうと彼がみなした教理的主張を執筆したものともみなしうるだろう」¹¹⁴

・Gilliam は反論してこれを教理論争の立場・用語が厳密化していく前のものとみなし、イグナティオス像を通して積極的に神学を提示しようとする自覚的アレリオス派のものとする¹¹⁵

→確かに落とすところを探るにしても口調・論法ともに攻撃的であるし、Gilliam が想定する事態そのものも十分考えられるものである。とはいえ.....

・Gilliam 自身も偽イの典拠と考える「長文の説明」は、同じく様々な立場を異端として反駁しつつ自身の立場を打ち出すものであるが、それにもかかわらず明確に eirenicon として

想定している。

¹¹² マグ 8.2, 前節註 76 参照。

¹¹³ 唯一出るのは、フィリ 12.3 において悪魔の誘惑を受けている最中のイエス・キリストの口を借りて偽イが語っている「私は対立神ではなく、超越を認め、その方に跪拝することを拒まない、その方を私は私の出生の原因者にして主、そしてヒュポスタシスの守り手であると知っている。「私は父を通して生きる」[ヨハ 6:57]からである (ὄν ἐπίσταμαι τὸν τῆς ἐμῆς γεννήσεως αἴτιον καὶ κύριον καὶ ὑποστάσεως φύλακα: ἐγὼ γὰρ ζῶ διὰ τὸν πατέρα)」。ただしギリシア語写本では ὑ.を含む破線部分が欠如しており、本文はラテン語訳 (quem novi natiuitatis meae auctorem et Dominum atque perseuerantiae custodem; ego enim vivo propter Patrem) とアルメニア語訳 (Petermann 1849, 430: գոր գիտեմ պատճառն ճնելութեան իմոյ՝ Չնա գնոյն ինքն գիտեմ տեր բնութանց. եւ եւ կենդանիեմ վասն որ) に基づく Zahn の推測に拠っている。アルメニア語が複数であるところは気になるが、ύφίστημι を「耐える」の意味で使っている用例が偽イ・マグ 11.3: 「苦難に耐えた方」(τὸ πάθος ὑποστάντι ラテン語訳は *passionem pertulit*) にあるから、ラテン語訳がヒュポスタシスをわざわざ *perseuerantia* と訳すことも想定できる (なお Petermann はラテン語訳から *ύποστάσεως* ではなく *ύπομονής* を推測している)。その場合、表現が含意しているのはイエス・キリストがその初めと存在の両方において父に依存していることを承知している、ということを含意することになる。従属論的傾向ともとれるが、ここが地上のイエスの口を借りて語られた部分だということを踏まえれば、そう解釈しなくても構わないようにも思われる。そしていずれにしてもヒュポスタシスは神の自立存在や位格を意味していない。

¹¹⁴ Lightfoot 1889, 1.2.273.

¹¹⁵ Gilliam 2017, 103.

起草されたものではなかつたらうか？

→併せて、350年代後半に「長文の説明」を担った人々の359年以降の足跡からは、和平（合同）を目指した行動がいくつか観察できる（II.5.で詳述）

II.3. Perlerによる位置付け

・Perlerは偽イをエメサのエウセビオスの思想と比較

☆エメサ主教エウセビオス：300年頃エデッサ生まれ。アンティオキアで活動し、エウセビオス派によりアタナシオスに代わるアレクサンドリア主教に叙階されたが赴かず、のちエメサ主教に叙階されたが現地の人々に受け入れられず、前述のラオディケイア主教ゲオルギオスを通じてアンティオキアに帰還した。ゲオルギオスとは様々に交流があり、彼から頌辞¹¹⁶を書かれたようだが、特定の教理的派閥を代表するような言説は残っていない。当時から高い学識で知られており¹¹⁷「アンティオキア派」に属するタルソスのディオドロスの聖書釈義上の師としても知られる¹¹⁸

・「半アレイオス的」な「御言葉」論、言葉・肉（ロゴス・サルクス）的キリスト論

・エメサのエウセビオスにおける関心：イエスはなぜ洗礼を受ける必要があったのか？

→「裸の（単なる）人間」説への反対、「裸の人間」＝魂＋肉、イエス・キリスト＝御言葉/力＋肉。罪を持たない（人間的魂がないことでこれが可能になる）キリストが死ぬことで全人類の罪を贖う。それにもかかわらずイエスが洗礼を受けたのは救いの秩序のため、祈るのは他の人間の模範となるため¹¹⁹

⇒偽イ・フィリ 9.1：「……お前（悪魔）は〔イエス・キリストが〕初めに共有の人間として洗礼を受けたものと見ながら、その理由を知らなかった。断食の後飢えたかの方を再び促して、共通の人間として、どなたなのか知らずに、試み始めた。……実にもし神の子だと知っていたら、悟つたらう、四十の昼と同数の夜に腐敗変転する身体を欠乏

¹¹⁶ ソクラテス『教会史』I. 24. 3；より詳細に、II. 9. 存命中に受けたのか、死去してから書かれたのかは定かでないが、エウセビオスの生き方を詳細に語るものであったようである。

¹¹⁷ ヒエロニムス『著名者列伝』91.

¹¹⁸ ヒエロニムス『著名者列伝』119 (PG23, 750)：「ディオドロスは、タルソス主教であるが、アンティオキアにおいて司祭であったときにより輝かしかつた。使徒〔パウロの書簡？〕への註釈とその他たくさんの著作が残っており、エメサのエウセビオスの特徴へ傾き、その「字義」を追ったが、その雄弁は模倣しえなかつた、世俗文学への無知のために」“Diodorus Tarsensis Episcopus, dum Antiochiae esset presbyter, magis claruit. Extant ejus in Apostolum commentarii, et multa alia, ad Eusebii magis Emiseni characterem pertinentia : cujus cum sensum secutus sit, eloquentiam imitari non potuit propter ignorantiam saecularium litterarum.” 研究者によっても詳細に研究がなされ、おおむね認められている。なおヒエロニムスはヨアンネス・クリュソストモスについてエメサのエウセビオスとタルソスのディオドロスの弟子と伝えるが（同 129）、活動時期からして、エウセビオスとヨアンネスの間に直接的師弟関係があつたとは考えにくい。

¹¹⁹ Perler 1958, 73-7. Perler が対象とするのはエウセビオスのラテン語訳説教 *De fide, De Apostolis II, De hominis Assumptione* など。これ以外にもアルメニア語で聖書釈義がいくつか残っている。

なく保った方は、永続的にそうすることが可能だと。それならばかの方はどうして飢えるのか？ 人間たちと同じ苦しみを受ける身体を真実に受け取ったと示すためだ。前者を通じて「ご自身が」神だと、後者を通じて人間だとお示しになったのだ」¹²⁰

エフェ 18.2: 「〈見よ、乙女が身ごもり、子を生む、その名はインマヌエル〉。この方は生まれ、洗礼を受けられました。それは「受難によって水が清められる」〈預言者（ダビデ）に託された約定を信ずるに足るものとする〉ためでした」¹²¹

→類似性。洗礼を受けたのは「罪の無い＝裸の人間ではない」キリストだが、肉体は別で、洗礼には救いの計画を踏まえた別の意図がある

- ・その他の類似性.....
- ・言葉・肉（ロゴス・サルクス）的キリスト論：Funk はこれを偽イ＝アポリナリオス派説の根拠とした。彼によれば、二派がそれぞれ言葉・肉的キリスト論を説いたのは

*アレイオス派：父と異なり子/御言葉は変化しうるものであり、そのために人間的な＝変化しうる肉と同居させることに違和感を持たなかったから

*アポリナリオス派：ニカイア的三一論に基づいて御言葉を変化しえないものとみなし、御言葉が主体として人間となった以上人間の主体性を担う精神/魂の位置に御言葉があるのがキリストだとしたから

→偽イの「栄光の主、本性において変化しえない方」¹²²（フィリ 5.2）という文言を取り上げ、また「名誉において等しい三者」（フィリ 2.4）¹²³という表現をニカイア派的なものとみなし、後者と結論付ける¹²⁴

- ・Perler の反論：御言葉を変化しうるものと位置付けたのはアレイオス派の中でも急進的なものだけで、エメサのエウセビオスを含む「保守派」はそうではない。例えばカイサレイアのエウセビオスのような傾向がそうだし、「名誉において等しい」との表現も「長文の説明」（！）に類似したものが見出せる¹²⁵

¹²⁰ フィリ 9. 1; 4: “Πάλιν ἰδὼν πρῶτον ὡς κοινὸν ἄνθρωπον βαπτιζόμενον καὶ τὴν αἰτίαν ἀγνοῶν· μετὰ δὲ τὴν νηστείαν πεινῶντι κατεθάρσει· πάλιν καὶ ἐπειράζεις ὡς κοινὸν ἄνθρωπον, ἀγνοῶν, ὅστις εἶη. εἰ γὰρ ἤδειξ, ὅτι υἱὸς θεοῦ ἦν, ἐγίνωσκες ἂν, ὅτι ὁ ἐν τεσσαράκοντα ἡμέραις καὶ ἰσαριθμοῖς νυξίν ἀνενδεδῆς ποιήσας τὸ φθαρτὸν σῶμα καὶ εἰς τὸ διηνεκὲς ἐδύνατο τοῦτο ποιῆσαι. διὰ τί οὖν πεινᾷ; ἵνα δείξῃ, ὅτι κατ’ ἀλήθειαν ἀνέλαβε σῶμα ὁμοιοπαθὲς ἀνθρώποις. διὰ μὲν τοῦ πρώτου ἐδειξεν, ὅτι θεός, διὰ δὲ τοῦ δευτέρου, ὅτι καὶ ἄνθρωπος.”

¹²¹ エフェ 18.2: “ἰδοὺ γάρ, φησὶν, ἡ παρθένος ἐν γαστρὶ λήψεται καὶ τέξεται υἱόν, καὶ κληθήσεται Ἐμμανουήλ. οὗτος ἐγεννήθη, ἐβαπτίσθη ὑπὸ Ἰωάννου, ἵνα πιστοποιήσῃται τὴν διάταξιν τὴν ἐγχειρισθεῖσαν τῷ προφήτῃ.”

¹²² “τὸν τῆς δόξης κύριον, τὸν τῆ φύσει ἄτρεπτον”

¹²³ “τρεῖς ὁμοτίμους”.

¹²⁴ Funk und Diekamp 1913, 152-3. そもそも、例えばアタナシオスも言葉・肉型キリスト論を唱えており、そこで人間の魂はほとんど役割をはたしていなかったとされる。ケリー 2010, 50-55.

¹²⁵ Perler, 81, Anm. 40. Perler が挙げる箇所では語られるのは名誉 τιμήではなく栄誉、位階 ἀξίωμαである。アタナシオス『両教会会議について』26. 9: 「御父を神と呼び、御子をも神と呼

→偽イ＝アポリナリオス派説を棄却し、「アレイオス派」のなかの「保守派」が著者であることを示唆するも特定を試みず¹²⁶

→最後の一文で Perler は Zahn による偽イ＝カイサレイアのアカキオス説を紹介しつつ「伝記的根拠 biographische Gründe」に基づいて批判的な見解を表明するが、興味深いことに彼はこの「伝記的根拠」に註を付け、1951年のオックスフォード教父学会で偽イ＝タルソスのシルウァノス説を論証できたと信じている、とし、伝記事項を簡単に紹介する¹²⁷。しかし管見によれば、そして残念なことに、このシルウァノス説が活字論文等として世に出た痕跡は無い！

⇒Perler の教会史用語はいずれも古いものだが、それにもかかわらず、その所説には一定の説得力がある。発表者も II.3.で、独自の分析により、タルソスのシルウァノスを含めた何人かの伝記的事項を、偽イ書簡の本文に即して扱うことを試みる

※付論：エルサレムのキュリロスとの類似

- ・ Lightfoot, Funk, Gilliam などが指摘
- ・ エルサレムのキュリロス 『洗礼志願者のための秘義講話』 (*Catecheses ad illuminandos*) : 350 年ごろ

* 偽イ：地上でのイエスの活動。真実に受肉したこと、「私たち」と同じ情動を持つ身体を持ったこと¹²⁸

* キュリロス：同じ主題で類似した言葉遣い¹²⁹

ぶが、このお二方をふたりの神々とは呼ばず、我々は神性の一つの栄誉と御国の唯一なる精確な調和を告白する” “θεὸν μὲν τὸν πατέρα λέγοντες, θεὸν δὲ καὶ τὸν υἱόν, οὐ δύο τούτους θεούς, ἀλλ’ ἐν ὁμολογοῦμεν τῆς θεότητος ἀξίωμα καὶ μίαν ἀκριβῆ τῆς βασιλείας τὴν συμφωνίαν”.

¹²⁶ Brennecke もこの Perler の反論を説得的と評価している (Brennecke 2018, 263)。

¹²⁷ Ibid., 82, Anm. 46.

¹²⁸ トラ 10.4: “ἀληθῶς τοίνυν ἐγέννησεν Μαρία σῶμα θεὸν ἔνοικον ἔχον καὶ ἀληθῶς ἐγεννήθη ὁ θεὸς λόγος ἐκ τῆς παρθένου σῶμα ὁμοιοπαθὲς ἡμῖν ἡμψιευμένους. ἀληθῶς γέγονεν ἐν μήτρᾳ ὁ πάντας ἀνθρώπους ἐν μήτρᾳ διαπλάττων, καὶ ἐποίησεν ἐαυτῷ σῶμα ἐκ τῶν τῆς παρθένου σπερμάτων, λὴν ὅσον ἄνευ ὁμιλίας ἀνδρός. ἐκυοφορήθη ὡς καὶ ἡμεῖς χρόνων περιόδοις, καὶ ἀληθῶς ἐτέχθη ὡς καὶ ἡμεῖς, καὶ ἀληθῶς ἐγαλακτοτροφήθη καὶ τροφῆς κοινῆς καὶ ποτοῦ μετέσχεν ὡς καὶ ἡμεῖς.”

¹²⁹ 『秘義講話』 4.9: “Πίστευε δὲ ὅτι οὗτος ὁ μονογενὴς Υἱὸς τοῦ Θεοῦ, διὰ τὰς ἀμαρτίας ἡμῶν ἐξ οὐρανῶν κατήλθεν ἐπὶ τῆς γῆς, τὴν ὁμοιοπαθῆ ταύτην ἡμῖν ἀναλαβὼν ἀνθρωπότητα, καὶ γεννηθεὶς ἐξ ἀγίας παρθένου καὶ ἀγίου Πνεύματος· οὐ δοκῆσει καὶ φαντασία τῆς ἐνανθρωπήσεως γενομένης, ἀλλὰ τῆ ἀληθείᾳ· οὐδὲ ὥσπερδιὰ σωλῆνος διελθὼν τῆς παρθένου, ἀλλὰ σαρκωθεὶς ἐξ αὐτῆς ἀληθῶς καὶ γαλακτοτροφηθεὶς ἀληθῶς. [φαγὼν ὡς ἡμεῖς ἀληθῶς καὶ πιών ὡς ἡμεῖς ἀληθῶς]. Εἰ γὰρ φάντασμα ἦν ἡ ἐνανθρώπησις, φάντασμα καὶ ἡ σωτηρία. Διπλοῦς ἦν ὁ Χριστὸς, ἄνθρωπος μὲν τὸ φαινόμενον, Θεὸς δὲ τὸ μὴ φαινόμενον· ἐσθίων μὲν ὡς ἄνθρωπος ἀληθῶς ὡς ἡμεῖς, εἶχε γὰρ τῆς σαρκὸς τὸ ὁμοιοπαθὲς ὡς ἡμεῖς· τρέφων δὲ ἐκ πέντε ἄρτων τοὺς πεντακισχιλίους ὡς Θεός· ἀποθνήσκων μὲν ὡς ἄνθρωπος ἀληθῶς, νεκρὸν δὲ τὸν τετραήμερον ἐγείρων ὡς Θεός· καθεύδων εἰς τὸ πλοῖον ἀληθῶς ὡς ἄνθρωπος, καὶ περιπατῶν ἐπὶ τῶν ὑδάτων ὡς Θεός.”

*偽イ：「モーセと預言者と使徒たちにおいて働いた聖霊は一つ」¹³⁰、「モーセと預言者と使徒たちにおいて働いた弁護者は一つ」¹³¹

*キュリロス：「これ（聖霊）が預言者たちにおいてキリストを宣べ伝えました。これが預言者たちに働きました。これが今日まで先例において諸々の魂を印づけています」¹³²

→受肉、聖霊などを語る際の語彙が類似。しかし著者同定の鍵になるほどかは疑問

・Hanson: エメサのエウセビオスはアレイオス派的傾向を持つが典型的アレイオス派とは言えず、エルサレムのキュリロスはアレイオス派的傾向を全く持たない者の典型的ニカイア派とも呼べず、いずれも同時代の神学的スローガンの使用を避けている¹³³

II.4. Hagedorn 説と Gilliam による批判

・Hagedorn 説（おさらい）：逸名『ヨブ記註解』の写本に残る「ユリアノス」を4世紀の「アレイオス派」の人物とみなし、語彙・語法の併行から4世紀のアンティオキアで編纂されたとされる『使徒教憲』と同著者とする。同じく両著作と偽イ書簡集における表現の併行を指摘し、三つの著作は同一著者によるものとする

→Cavalcanti¹³⁴, Chadwick, Metzger などが支持¹³⁵、Brennecke は類似を認めつつも未解決の問題とする¹³⁶

・Gilliam の批判：①Hagedorn が示唆するエウノミオスに叙階されたアナザルボス主教ユリアノスについては、それ以上の証拠がなく、ユリアノスという人物の素性が明らかでない②Hagedorn の挙げる『ヨブ記註解』と『使徒教憲』の併行箇所は説得的だとしても、『ヨブ記註解』と偽イの併行箇所は根拠として弱い

¹³⁰ フィリ 1.2: “ἐν δὲ καὶ πνεῦμα ἅγιον τὸ ἐνεργῆσαν ἐν Μωσῆ καὶ προφήταις καὶ ἀποστόλοις.”

¹³¹ フィリ 5.3: “εἷς δὲ καὶ ὁ παράκλητος, ὁ ἐνεργήσας ἐν Μωσῆ καὶ προφήταις καὶ ἀποστόλοις.”

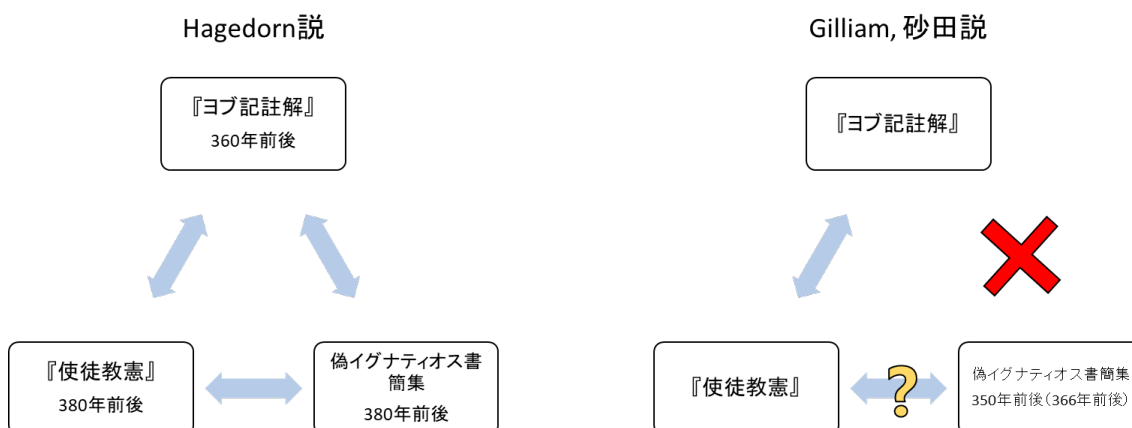
¹³² 『秘義講話』16:24: “Τοῦτο περὶ Χριστοῦ ἐκήρυξεν ἐν προφήταις. τοῦτο ἐνήργησεν ἐν ἀποστόλοις. τοῦτο μέχρι σήμερον ἐν βαπτίσματι σφραγίζει τὰς ψυχάς.”

¹³³ Hanson 1988, 413.

¹³⁴ Cavalcanti, s. v. “Julian, Arian (4th c.)” in di Berardino, 2014 [2007], vol. 2, 482.

¹³⁵ Gilliam 2017, pp. 104-7.

¹³⁶ Brennecke 2018, 255.



・『使徒教憲』と偽イの併行箇所も相当程度に説得的だという事実を補足すれば、発表者も同意見

・Hagedorn が挙げるのは 11 例¹³⁷だが、そのうち偽イ『フィリピの人々への手紙』における「悪魔弾劾文」(5.1-12.3)に含まれる、悪魔の描写に関わるものが 6 例=(3)(4)(5)(6)(10)(11)。Gilliam は Hagedorn 説を補強するかもしれない併行箇所として『ヨブ記註解』 263.12 と偽イ・フィリ 4.4 を挙げるが、これも悪魔の描写。Hagedorn が挙げる残りの 5 例のうち、(7)はタル 2.1 における悪魔描写、(9)はトラにおける異端者描写、(1)はそもそも『知恵の書』に共通の典拠を認めうるもので、(2)は「人間性 ἀνθρωπότης は一つ μία」という趣旨の数語のみの併行、(8)はエリフ/偽イを主語として自分がふさわしくない προσάντης もと思われる δοκέω ことがないように ἵνα μη、というやはり数語から成る表現

→「悪魔弾劾文」(とついでに異端者描写)に用いられる痛罵に限って質量ともに十分な併行(本発表では詳細に扱わない)。とすると、著者同定の根拠としては弱いのでは? 『使徒教憲』が個人ではなく集団による編纂物である可能性もある。ユリアノスが偽イの特に『フィリッポイの人々への手紙』の「悪魔弾劾文」を引用しているか、悪魔の表現に関する共通の資料を想定すべき? そもそも『ヨブ記註解』の異本質的=反ホモウーシオス・反ウーシア的の神学と偽イの神学は合致するところが少ない

・Gilliam は『使徒教憲』と偽イの同一著者説にも否定的。Hagedorn 説に従って『ヨブ記註解』を 360 年ごろ、『使徒教憲』と偽イ書簡集を 380 年ごろのアンティオキアで成立したとする Metzger を、A.『ヨブ記註解』と偽イの併行の弱さ B.偽イの年代は 350 年ごろにまでさかのぼらせることが可能で、アンティオキアに結びつける必要は必ずしもないこと C.偽イによる『使徒教憲』引用とされるものはその逆である可能性、の 3 点から批判する¹³⁸。A.は既に検討した。C.はもともとである。しかし B.はやはり説得的でない。その理由を含めて、後回しにしてきた偽作・改竄の地理的・人物的設定と時代背景の検討に移る必要がある

¹³⁷ Hagedorn 1973, II-LI.

¹³⁸ Gilliam 2017, 107, n. 30.

II.5. 偽作・改竄の地理的・人物的設定と時代背景

- ・偽作書簡・改竄書簡ともに真作の書簡形式を崩さず
- ・真作書簡には、宛先の他にいくつかの地名や人名が断りなしに言及される

たとえば：人名

- *エフェソスの監督オネーシモス、マグネシアの監督ダマスなど
- *エフェソスの執事（輔祭）で、イグナティオスに随行してトロアスで彼の言葉を口述筆記？していると思われるブーッロス（エフェ 2.1; フィラ 11.2; スミュ 12.1）
- *旅の当初から随行してきているキリキアの執事フィローン、シリアの人アガトプース（フィラ 11.1, スミュ 10.1）

☆偽イ：真作書簡末尾の挨拶にはほとんど改竄を加えず、A.偽作書簡ではそれらをそのまま用いたり、B.新約書簡に基づいて設定を増したり、C.独自設定を増し加えたり、D.新たな人物を導入したりする

- *A.オネーシモス、ダマスなどへの呼びかけ（アン 13.2）
- *B.使徒の弟子たちへの言及（トラ 2.7, フィラ 6.4）
- *C.フィローンとアガトプースが「輔祭たち」と呼ばれる（偽イ・フィリ 15.1）：キリキアとシリアをそれぞれ代表？
- *D.宛先人であるカッソボラのマリア、アンティオキアの輔祭ヘロン¹³⁹
- *D.アンティオキアでの「主人」（ξένος）カッシアノス¹⁴⁰とその妻子：家族共同体を暗喩？

→真イにおいては、実際の間人間関係を反映していると同時に、書簡どうしのつながりを保証する機能。偽イは真作書簡との関係を広げつつ、偽作書簡どうしのつながりも強化している¹⁴¹

たとえば：地名

*執筆地：

- ・I.1で概観したとおり、執筆地はイグナティオスの行程に沿って設定されており、スミ

¹³⁹ マリアはこの書簡集にしか現れない。イグナティオスの後主教に選ばれたヘロンについてはカイサレイアのエウセビオス『教会史』III.36.15, IV.20.1

¹⁴⁰ 偽イにのみ現れる人物で、挨拶以上の役割を占めているわけでもないため、パウロ書簡を形式的に模倣する（たとえばイグ・マリ 5, 2 とパ・ロマ 16:23）以上の役割があるのかどうか興味深い。なお「カッシアノス教会」（al-Qusyān）なる教会堂がアンティオキア市に立っていたことが知られ、513年に初めてアンティオキアのセウエロスがこれに言及している（Mayer and Allen 2012, 52-4）。Abū al-Makārim などのアラビア語史料では、使徒ペトロの奇跡によって死からよみがえった王子（？）カッシアノスがそれを記念して教会堂を建てたことになっているらしい（Mayer and Allen, *ibid.*, 52, n. 49）。後述するアナザルボス市の名をめぐる伝承などと同様に、偽イグナティオス書簡はしばしばシリア・キリキアをめぐる4世紀時点での歴史的伝承を証言するが、あまり注目されていない。

¹⁴¹ Vinzent 2019, 402. なお橋 2021 も参考にした。

ュルナとトロアスで執筆したこと、そこから渡海してトラキアのネアポリスに赴くことを告げる真作書簡に対し、そのすぐ先のフィリップポイに偽作書簡 4 通の執筆地を設定するなど、地理を拡大

- ・各『殉教』¹⁴²とも併行が見られる（アンティオキア版：アンティオキア→スミュルナ¹⁴³→トロアス¹⁴⁴→ネアポリス→フィリップポイ→エペイロス¹⁴⁵→ポティオラ¹⁴⁶→ローマ、ローマ版：アンティオキア→アジア→トラキア→レギオン¹⁴⁷→ローマ）。太字は偽イに現れるもの

→この行程のうち、アンティオキアから出発してトロアス→ネアポリス→フィリップポイと進んだ点はパウロの「第二回宣教旅行」[使 16:8-12] に、レギオン→ポティオラ→ローマと進んだ点はパウロの「ローマへの旅」[使 28:13] とも一致する

*その他地名の言及：注目すべきは『マリアへの手紙』と『ヘロンへの手紙』

- ・マリアへ：I.2 で概観したとおり、カッソボラ出身だが、「ザルボスのネアポリス」＝アナザルボス¹⁴⁸にて生活していることが読み取れる¹⁴⁹。イグナティオスに恭しく¹⁵⁰アナザルボス主教・カッソボラ司祭の派遣を要請する¹⁵¹

¹⁴² 偽イグナティオス書簡集成立後、二つのギリシア語『殉教』が成立した。一方は 4 世紀末-5 世紀にかけて成立したもので、アンティオキアに遺骨が運ばれたことを記載しているため *Martyrium Antiochenum* と呼ばれ、書簡といくつか事実の食い違いが見られる。他方は 8 世紀以前に成立したもので、ローマで殉教したところで語りが終わっていることから *Martyrium Romanum* と呼ばれる。本文はそれぞれ Funk und Diekamp 1913, 324-39, 340-62 を参照。

¹⁴³ アンティオキア版『殉教』3, 1.

¹⁴⁴ *ibid.*, 5, 1.

¹⁴⁵ ネアポリス～エペイロス：*ibid.*, 5, 2.

¹⁴⁶ *ibid.*, 5, 3.

¹⁴⁷ アジア～レギオン：ローマ版『殉教』1, 2.

¹⁴⁸ 「ザルボスのネアポリス」についてはアナザルボス近くのネアポリスという都市（場所不詳）を指すという説と、アナザルボスそのものを指すという説がある。まず” $\pi\rho\delta\varsigma\tau\omega\text{ } \text{Ζα\rho}\beta\omega\text{ } \text{}$ ”であるが、ザルボスという川や土地は（アナザルボスのことを指すのでないならば）存在しない。他方ネアポリスについては、原義通り新たな都市とも解釈しうる。アンミアヌス・マルケリヌス（4 世紀, 14.8.3）やスーダ（10 世紀）は、ネルウァ帝の逸話として、地震で倒壊したキュインダ/ディオカイサレイアにアナザルボス（-ボス）なる人物を派遣して再建させ、それが新たに都市の名前となった、と伝承する（大プリニウス『博物誌』5.93.4 にすでにアナザルボスという地名が言及されているので歴史的信憑性は無いが、重要なのは伝承の方である）。同じ伝承を伝えるヨアンネス・マララス（6 世紀）は派遣された人物をザルボスとする（10.53）。マララスはザルボスが再建した（ana-, 再）のがアナザルボスだ、と理解していると思われる。これらの伝承は偽イグナティオスによる表現を完全に解決しないが、再建伝承の初出たるアンミアヌスと同時代かそれより早いことを考えると、別の伝承を有していたことも考えられ、例えばそれによりキュインダ/ディオカイサレイア倒壊後ザルボスという土地に再建された新市だからアナザルボスだ、と偽イが考えていたとすれば、アナザルボスそのものを指してそう呼んでいることになる。何よりキリキアにネアポリスという都市は確認されていない。発表者は「ザルボスのネアポリス」＝アナザルボス説を採用し、以降アナザルボスと表記する。

¹⁴⁹ マリ・イグ 1.1.

¹⁵⁰ マリ・イグ 5.1-3.

¹⁵¹ マリ・イグ 1.1.

→カッソボラ、アナザルボス、アンティオキア

・ヘロンへ：アンティオキア教会の輔祭。本書簡中でイグナティオスが主教位の継承に触れているわけではないが、『アンティオキアの人々への手紙』最末尾で、他の挨拶から切り離されてある「私に代わってあなた方を統べるであろう人にご挨拶申し上げます。私もその人に、キリストにおいて喜びたいと思います」という文言が、次の『ヘロンへの手紙』の宛先人を巧妙に示唆する、という形式をとっている。このヘロンへの挨拶は以下の通り

「わが主人カッシアノスとそのもっとも尊厳ある奥様、そしてこの上なくかわいい子らによろしくお伝えください。彼らに「神が主のもとでかの日に憐れみを見出させてくださるよう」 [II テモ 1:18]、私たちに対する奉仕精神のために。彼らを私もまたあなたに委ねます。ラオディケイアの信仰者たち皆にキリストの名においてよろしくお伝えください。タルソスの人々もなおざりにしないでください、むしろもっと絶えず彼らを注視してください、彼らを福音に対して力強くしつつ [使 15:41]。ザルボスのネアポリスの主教マリスに主においてご挨拶申し上げます。またこの上なく尊厳ある、私の娘、この上なく学識深いマリアと、その家の教会によろしくお伝えください——私が彼女（マリア？ 教会？）の魂の代わりとなれますように——、敬虔な女性たちの模範たる彼女に。あなたが健康で万事輝かしくあらんことを、キリストの父が、独り子ご自身を通して、神の教会の利益のためこの上なく長い生へとお守りくださるよう。主においてお元気で、そして祈ってください、私がことを成し遂げられるように」¹⁵²

→ラオディケイア、タルソス、アナザルボス

⇒『フィリッポイの人々への手紙』がトラキアから西へ地図を拡大させているのに対し、それ以外はキリキア・シリアへ拡大させている

・以上の地名とそれが偽イ書簡内で果たす役割を整理しなおし、それぞれが同時代の教会史的状况にいかなる関わり方をしていたのか概観する

※同時代よりも前に、偽イはあくまでトラヤヌス帝代の殉教者イグナティオスを騙っていたわけだから、まず 2 世紀初頭の状況を念頭に置いていたと仮定すべきではないか、という反論が出ることは想定しているが、偽イも資料としたと考えられるエウセビオス『教会史』に描かれている初期教会の中にキリキアの姿は無い（「キリキア」という地名

¹⁵² ヘロ 10.1-4: “Ἀσπασαι Κασσιανὸν τὸν ξένον μου καὶ τὴν σεμνοτάτην αὐτοῦ ὁμόζυγον καὶ τὰ φίλτατα αὐτῶν παιδία· οἷς δώσει ὁ θεὸς εὐρεῖν ἔλεον παρὰ κυρίου ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ ὑπὲρ τῆς εἰς ἡμᾶς διακονίας· οὗς καὶ παρατίθημί σοι ἐν Χριστῷ. ἄσπασαι τοὺς ἐν Λαοδικείᾳ πιστοὺς ἅπαντας κατ’ ὄνομα ἐν Χριστῷ. τῶν ἐν Ταρσῷ μὴ ἀμέλει, ἀλλὰ συνεχέστερον αὐτοὺς ἐπίβλεπε, ἐπιστηρίζων αὐτοὺς τῷ εὐαγγελίῳ. Μάριν τὸν ἐν Νεαπόλει τῇ πρὸς τῷ Ζαοβῷ ἐπίσκοπον προσαγορεύω ἐν κυρίῳ. πρόσειπε δὲ καὶ τὴν σεμνοτάτην Μαρίαν τὴν θυγατέρα μου τὴν πολυμαθεστάτην καὶ τὴν κατ’ οἶκον αὐτῆς ἐκκλησίαν, ἧς ἀντίψυχον γενοίμην, τὸ ἐξεμπλᾶριον τῶν εὐσεβῶν γυναικῶν. ὑγιαίνοντά σε καὶ ἐν πᾶσιν εὐδοκιμοῦντα ὁ πατήρ τοῦ Χριστοῦ δι’ αὐτοῦ τοῦ μονογενοῦς φυλάττει ἐπὶ μήκιστον βίου χρόνον εἰς ὠφέλειαν τῆς τοῦ θεοῦ ἐκκλησίας. ἔρωσο ἐν κυρίῳ καὶ προσεύχου, ἵνα τελειωθῶ.”

もオリゲネスの時代になって初めて言及される)。使徒行伝には注目すべき要素がいくつかある。ステファノと議論したユダヤ人の出身地の一つにキリキアがあり(5:8)、また「使徒会議」の結果を報告する書簡は「アンティオキアとシリアとキリキア」に宛てられている(15:23)。とはいえ、ここでは分析対象とできない

- *カッソボラ：書簡の題名に現れるマリアの出身地で、彼女の請願により輔祭エウロギオスがアンティオキアから派遣されている(マリ・イグ 1.1)。おそらくキリキア北東の都市カスタバラ(いずれも中性複数)のことと推定される。女神アルテミス・ペラシアの崇拝で知られ、ヒエラポリスとも呼ばれた。現在は遺跡となっており、近年4-5世紀建造の教会遺構も近年発掘されている¹⁵³。360-70年代にタルソス主教シルウァノスによりパレスティナのエレウテロポリスから移管され相似本質派として活動したカスタバラ主教テオフィロスの名が知られる
- *アナザルボス：書簡中ではマリアの活動地として現れ、その請願により主教マリスが派遣される。既に見たように、カッソボラのマリアと併せて『ヘロンへの手紙』でも言及される。主教カスタバラから少し西に位置する都市で、古名キュインダ。4世紀の主教として、①アンティオキアのルキアノスの弟子としてアレリオスの同輩で、332年ごろ¹⁵⁴アンティオキアから来た若きアエティオス(のちエウノミオスの師)を庇護したアタナシオス、②エウノミオスにより叙階されたユリアノス¹⁵⁵が知られる。また392年頃にはモプスエスティアのテオドロスが相似本質派とアナザルボスで議論の機会を持った。この議論の議事録がシリア語訳『テオドロスとマケドニオス派の対話』として伝存している¹⁵⁶
- *アンティオキア：イグナティオスの主教任地。偽作書簡の宛先の一つで、「これ(キリストを信じる者が新たな名で呼ばれ聖なる民[イザ 62:2, 12]となるという預言)は初めにシリアで成就しています、というのも「アンティオキアで弟子たち」——教会を基礎づけたパウロとペトロー——「が初めてキリスト者と呼ばれるようになったから」[使徒 11:26]¹⁵⁷と言われる。またイグナティオスの前任者で使徒たちから初めてアンティオキア主教として叙階されたとされるエウオディオスに言及し、使徒の伝承を保持することを当地の信徒たちに勧めている。挨拶部分では聖職者組織の各階級に対し下級聖職者の細かい役職(4世紀中盤以降にしか確認できないものを含む)を網羅する形で挨拶し、他にもエフェソス主教、マグネシア主教、トラレス主教に言及。対して『ヘロンへの手紙』の挨拶部分は既に見たように個人的に親密な感情を持っていると思わせるような対象に言及しており、『アンティオキアの人々への手紙』挨拶部分の公的な性格と対比される。4世紀中盤にはレオンティオス(エウセビオス派)が359年まで、相似派でしばしば異本

¹⁵³ Zeyrek 2016, 97-105.

¹⁵⁴ Kaster 1988, 5.

¹⁵⁵ すでに何度も言及している、Hagedorn や Nautin が JA 文書の著者と推測する人物。

¹⁵⁶ PO 9, 635-67.

¹⁵⁷ マグ 10.2: “ὅπερ καὶ πεπλήρωται πρῶτως ἐν Συρίᾳ· ἐν Ἀντιοχείᾳ γὰρ ἐχρημάτισαν οἱ μαθηταὶ Χριστιανοί, Παύλου καὶ Πέτρου θεμελιούντων τὴν ἐκκλησίαν”

質派を支援したエウドクシオスが 359-360 年に主教を務めた。彼がコンスタンティノポリス主教座へ移った後、相似派によりメレティオスが叙階されるが何らかのトラブルで追放され、数か月後相似派のエウゾイオスが叙階される。この状況でユリアヌス帝の被追放主教帰還令が出されアンティオキア教会分裂に至る

*ラオディケイア：シリアの都市で、アンティオキアの南に位置する。『ヘロンへの手紙』での一回のみ言及。350 年末には主教ゲオルギオスが相似本質派・反相似派として活動。アンキュラのバシレイオスやエメサのエウセビオスと（既出）、また洗礼と典礼に関する著作で有名なエルサレムのキュリロスとも親交を持っていた¹⁵⁸。またニカイア派のアポリナリオスと対立した¹⁵⁹。360 年ごろ追放されたと推測

*タルソス：キリキアの首府でパウロの出身市。偽作書簡の宛先の一つで、「あなた方はパウロ、「エルサレムからイリュリウムまで巡ってキリストの福音と焼き印を」その体に背負って回り「宣べ伝えた」[パ・ロマ 15:19] 人の同市民にして弟子だからです」¹⁶⁰と言われる。またその挨拶部分では「あなた方にアンティオキアの教会を託します」¹⁶¹と言われており、シリアの教会について祈り記憶するよう依頼するものを別とすれば、真作書簡を含め異例で、スミュルナ主教ポリュカルポス¹⁶²、ヘロン¹⁶³と同じ地位が与えられている。先に引用したヘロ 10.2 でも、ヘロンが彼らを注視し力強くする（ἐπιστηρίζω: これはパウロが使 15:41 で「シリアとキリキア」に対して行ったとされているのと同じ動詞）ことを求められている。4 世紀には主教シルウァノスが相似本質派として活動し（既述）、エルサレムのキュリロスが追放された際に庇護してカイサレイアのアカキオスから非難された。366 年にはセバステイアのエウスタティオス、カスタバラのテオフィロスとともに西方教会との合同を交渉する使者として赴いた。このシルウァノスはカイサレイア主教大バシレイオス（新ニカイア派）にも高く評価されており、彼はその死後タルソスに相似派の主教が叙階されたことを嘆いている。378 年にはウァレンス帝敗死とともにアンティオキアの司祭ディオドロス（新ニカイア派）——バシレイオスは彼を「故シルウァノスの養畜」¹⁶⁴と言っている——がアンティオキアからメレティオス派（新ニカイア派）主教として叙階される

→5 つの都市を概観したが、キリキアの都市、アナザルボスとカスタバラが偽イと親密な人物を擁するものとして、タルソスが公的な教会運営におけるものとして重視され

¹⁵⁸ ソゾメノス『教会史』IV.25.

¹⁵⁹ ソクラテス『教会史』II.46, ソゾメノス『教会史』VI.25.

¹⁶⁰ タル 2.2: “Παύλου γὰρ ἐστε πολῖται καὶ μαθηταί, τοῦ ἀπὸ Ἱεροσολύμων καὶ κύκλω μέχρι τοῦ Ἰλλυρικοῦ πεπληρωκότος τὸ εὐαγγέλιον καὶ τὰ στίγματα τοῦ Χριστοῦ ἐν τῇ σαρκὶ περιφέροντος.”

¹⁶¹ タル 10.1: “παρατίθεμαι ὑμῖν τὴν ἐν Ἀντιοχείᾳ ἐκκλησίαν.”

¹⁶² *ibid.*: “Πολύκαρπος ὁ ἄνθρωπος θεοῦ, ᾧ καὶ παραθήσομαι τὴν ἐκκλησίαν τῆς Συρίας”; アン 13.1: “ἀσπάζεταιται ὑμᾶς Πολύκαρπος……, ᾧ καὶ παρεθέμην ὑμᾶς ἐν κυρίῳ.”

¹⁶³ ヘロ 7.2.

¹⁶⁴ 『書簡』244.3: “Διόδωρον δὲ ὡς θρέμμα τοῦ μακαρίου Σιλουανοῦ τὸ ἐξ ἀρχῆς ὑπέδεξάμεθα”

ている。またアンティオキア以外の都市では、4世紀中盤に相似本質派の活発な動きが確認できた。他に特筆すべきものとして

*ローマ：イグナティオスの殉教地であり、書簡の宛先の一つ。「日の沈む方」。イグ・マリ（執筆地：アンティオキア？）ではマリアがアネンクレートス（アナクレトゥス）から教えを受けたことになっている。またクレメンスがアナクレトゥスに代わり司教を務めているとされるが、フィラ 4.4（執筆地：レギオンからローマの間）では故人ということになっている。殉教の文化において殉教したのがどこかという問題は重要であり、その意味においてイグナティオスは「ローマの」殉教者であった¹⁶⁵。教会史にも様々な形で関与するが、基本的には西方司教たちおよびアタナシオスと連携しニカイア公会議に忠実な姿勢を貫いた。355年コンスタンティウス2世によりリベリウス（在位352-366）が追放され司教フェリクスが立てられたが翌年リベリウス自身都市に戻っている。このリベリウスがエウスタティオスやシルヴァノスの使節を迎えた（後述）

・Zahnはギリキアの主教のある者がアンティオキアの権威を認めない状況があり、アカキオスのような人物がエウドクシオスのために偽イ書簡を通して援助したと推測。また多数の人名・地名について、創意工夫の才能の無さのため（！）同時代の人名（カルケドン主教マリス、タルソス主教シルヴァノス、アナザルボス主教アタナシオス、カスタバラ主教テオフィロス、その他）からヒントを得たと推測¹⁶⁶

→ギリキアに注目している点には賛同するが、偽イの意図と、後半の創意工夫云々には賛同しがたい

*まず『ヘロンへの手紙』を読めばわかるように、ヘロンに託されるラオディケイアやタルソス、主教マリスやマリアへの態度は抑制的・対等的で、大主教座-主教座の主従関係を示すような文言はほとんどない。これは父-キリスト-主教-司祭-輔祭-民、という強烈で一方通行的な上下関係を規定する箇所とは対照的。Zahnの主張からこのような書き方が出てくるだろうか？

*「教会史的状況」①②で説明したとおり、タルソスのシルヴァノスはカルケドンのマリスやZahnが偽イの著者と推測するアカキオスなど相似派とは対立する陣営に属した。そもそもいくらでもいる中でなぜその人々？

¹⁶⁵ イグナティオスとその伝記的事項からアンティオキアとローマの信仰上のいわば「共通財産」とみなされたことは、例えばヨアンネス・クリュソストモス『イグナティオス講話』におけるアンティオキアとローマ双方にとってのイグナティオスの貢献の対比や、大グレゴリウス（590-604）が『書簡集』V.39のアンティオキア主教アナスタシウス（在位561-571, 593-599）宛書簡からも伺える：「アーメン、恵みあれ（偽イ・ポリュ 13.3, エフェ 21.2）。私はあなたのお書き物から受け取ったことをそのまま私の手紙に挿入しますが、それは、幸いなる聖下に、聖イグナティオスについてはあなたの方のものであるだけでなく、私たちのものでもあるということを知っていただくためなのです」（Amen. gratia. Quae videlicet verba de scriptis vestris accepta idcirco in meis epistulis pono, ut de sancto Ignatio vestra beatitudo cognoscat, quia non solum vester est, sed etiam noster）

¹⁶⁶ Zahn 1873, 159.

・Vinzent はマリスという名前が 1-2 世紀のアナザルボスの碑文にとりわけ多く現れることから、偽イが local knowledge を持っていたものと推測し、偽イ書簡はアナザルボスもしくはその近郊で生み出されたと主張する¹⁶⁷

→興味深い着眼点だが一つの手法に依存した主張に留まる

⇒地名について考察した二人が結論としてキリキアに関係づけていることは興味深い。
以下では、359 年以降の教会史と照合することで、Vinzent よりも広い視野で考察し、Zahn とは正反対の結論を提示する

☆教会史的状況③

・359 年のセレウキア教会会議を担った相似本質派は、すぐ後の 360 年にコンスタンティウス 2 世が臨席するコンスタンティノポリス教会会議でウーシアという語の使用を禁じる相似派が勝利し、ニケ信条が採択された結果、一部が追放されるなどの憂き目に遭うことになった（アンキュラのバシレイオスとラオディケイアのゲオルギオスが追放、コンスタンティノポリス主教マケドニオスが追放され後任としてエウドクシオスがアンティオキア主教座から移管されて叙階、シルウァノスもカスタバラ主教テオフィロスの任地移管の件で告発されている）¹⁶⁸。しかし 361 年にコンスタンティウス 2 世が急逝した結果、後続諸皇帝の治世下で生き残りを模索することに

・ユリアヌス帝の短く波乱万丈の治世のあと、363 年にヨウリアヌスが東方で即位すると、アンキュラのバシレイオスを筆頭とする同一本質派が皇帝に「非相似派」排斥と自身たちの正統性認定を訴えた。ヨウリアヌス帝がこれを無視して教会間平和を求めると、カイサレイアのアカキオスは自分たちがすでに追放したはずのアンティオキアのメレティオスにすり寄りともにアンティオキア教会会議を開催する。この会議では「同一本質」すなわち「子が父の本質より生まれ本質に即して父に相似」¹⁶⁹と規定され、皇帝はこれを認め、ともかく合同が成った¹⁷⁰

・これに対し相似本質派は、364 年のランプサコス教会会議において、キュジコス主教エレウシオスの主導で、「アンティオキアの、セレウキアで押印された信条」を確認し、アカキオスやエウドクシオスら相似派のアナテマを決議した¹⁷¹。しかしこの派閥・会議はプロコピオスの反乱を鎮圧して教会政策に当たり始めた新帝ウァレンス（コンスタンティノポリ

¹⁶⁷ Vinzent 2019, 402

¹⁶⁸ ソゾメノス IV.24.13. なおキュロスのテオドレトスはこの会議について記す節で、シルウァノスが「同一本質」の教理とニカイア信条を擁して抵抗したかのような書き方をしているが、このような特筆性のある出来事がソクラテス・ソゾメノス兩人により無視されたとは考えにくく、別の史料に基づくか、潤色と見るべきであると思われる。しかし、いかなる資料やいかなる動機による潤色に基づくのかは興味深い問題である。

¹⁶⁹ ソクラテス III.25.14: “ἐκ τῆς οὐσίας τοῦ Πατρὸς ὁ Υἱὸς ἐγεννήθη, καὶ ὅτι ὁμοίος κατ’ οὐσίαν τῷ Πατρὶ”

¹⁷⁰ ソクラテス III.25.

¹⁷¹ ソクラテス IV.4

ス主教エウドクシオスを支持) の支持を得ることができず相似派による圧力を再び受けることに。この状況で 366 年にセバステイア主教エウスタティオス、タルソス主教シルウァノス、カスタバラ主教テオフィロスから成る使節団が西方に赴いてローマ司教リベリウスと会談し、同一本質派(ニカイア派)との合同を模索することを決める。使節団は実際にローマに赴き、警戒するリベリウスに対し「既に非相似派を否定したし、子は父にあらゆる点で相似であり、同一本質と(あらゆる点での)相似は同じ」¹⁷²と答え、書簡に押印を受け取り無事ローマ及びシチリアの主教たちと交わりを持った

・帰還した使節団は、テュアナに教会会議を開いた¹⁷³カッパドキアのカイサレイアのエウセビオスなど同一本質派の主教たちに書簡を届け、喜んだ同一本質派と使節団含む相似本質派が合同するための会議を 367 年春のうちにタルソスで開催することが決まる

→363 年のアンティオキアと 364-7 のランプサコス→タルソスでそれぞれに合同の試み

・ところがこれと併行してカリアのアンティオキアにて教会会議が開かれ、合同反対派が「同一本質の用語を拒み、「アンティオキアとセレウキアで提示された信条」を、それが殉教者ルキアノスのものであり彼ら以前に人々により危険と労苦をかいぐって認証されたものだとして、支持するべきだと決議した」¹⁷⁴。

→同一本質派の分裂。合同賛成派：タルソス 合同反対派：カリアのアンティオキア。タルソスが選ばれたことにシルウァノスの主導を読み取ることは難しくない

・ところがウェアレンスは(教会史家たちはエウドクシオスの指嗾を原因とするが)タルソスで開催予定の会議を中止させた¹⁷⁵

→会議は失敗したが使節による合同はある程度効力を持った(おそらくこの頃エルサレムのキュリロスが同一本質派に合同した)。しかしシルウァノスは 369 年かその直前に亡くなったらしい¹⁷⁶。このことと関係があるかどうかかわからないが、使節団の他の二人セバステイア主教エウスタティオスとカスタバラ主教テオフィロスはカッパドキアのカイサレイア主教大バシレイオス(370-79)などの同一本質派(新ニカイア派)と 373 年に降決裂した(有名なエウスタティオスとバシレイオスの決裂)¹⁷⁷

→しかし使節を通じた合同がある程度成功していたことは、同一本質派(新ニカイア派)の勝利を告げる第一コンスタンティノポリス公会議(381年)の際に未だ合同しない相似

¹⁷² ソクラテス IV.12.6: “ἠρνήσθαι μὲν ἤδη πρότερον τὴν τῶν Ἀνομοίων πίστιν, ὅμοιον δὲ ὠμολογηκέναι κατὰ πάντα τὸν Υἱὸν τῷ Πατρὶ, μηδὲν τε διαφέρειν τοῦ ὁμοουσίου τὸ <κατὰ πάντα> ὅμοιον”

¹⁷³ ソゾメノス『教会史』VI.11.2

¹⁷⁴ 同 12.4: “παρητοῦντο δὲ τὸ τοῦ ὁμοουσίου ὄνομα, καὶ τὴν ἐν Ἀντιοχείᾳ καὶ Σελευκείᾳ ἐκτεθεισάν πίστιν χρῆναι κρατεῖν ἰσχυρίζοντο, ὡς καὶ Λουκιανοῦ τοῦ μάρτυρος οὖσαν καὶ μετὰ κινδύνων καὶ πολλῶν ἰδρώτων παρὰ τῶν πρὸ αὐτῶν δοκιμασθεῖσαν”

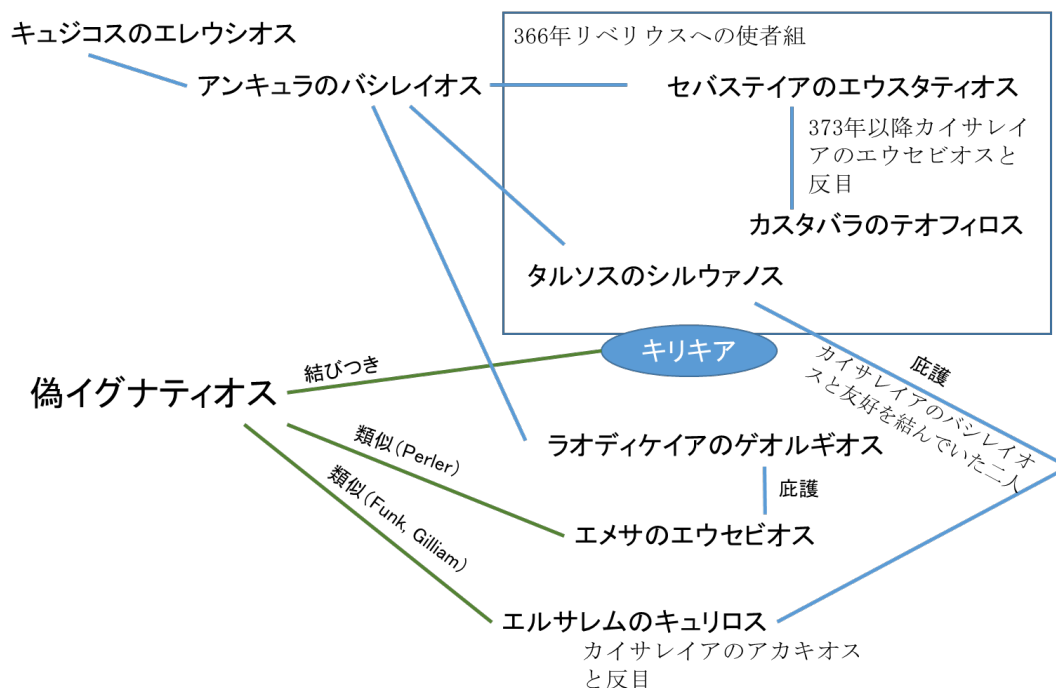
¹⁷⁵ ソクラテス『教会史』IV.12.40, ソゾメノス『教会史』VI.12.5.

¹⁷⁶ カイサレイアのバシレイオス『書簡』43.1.

¹⁷⁷ この経緯について、山村『聖大バシレイオスの『聖霊論』』解説を参照のこと。テオフィロスについては、バシレイオス『書簡』130.1, 244. 2, 245 でバシレイオスが苦々しく言及している。

本質派の主教たちが招かれ、「彼ら自身が以前にローマ司教リベリウスにエウスタティオスたちを通じて派遣した使節のことを思い起こさせて」¹⁷⁸合同させようと試みたことからも窺われる（この時の合同は失敗）

アンキュラ、セレウキア教会会議周辺の人物相関図



まとめ

- ・偽イは何者か？
- ・「長文の説明」：顕著に類似。しかし執筆者が同じとはかぎらず、Gilliamが言うように近い年代に執筆されたとも限らない。しかも 350 年代末以降アンキュラ教会会議を担ったグループがこれを用いていた可能性が高い
- ・現れる地名・人名の分析によると、キリキアに対す特筆すべき関心が認められる。そして同時代のキリキアから二人の主教が合同を目指したローマへの使節に参加している
→344/5 年、「長文の説明」編纂時と状況が類似
- ・イグナティオスとまず結び付けられるアンティオキアもこの頃揺れていた。362 年以降は「大分裂」。メレティオス派はアカキオス派＝相似派から離反するような動き（相似派はこれを抑圧したりすり寄ったり）

¹⁷⁸ ソクラテス『教会史』V.8.7: “ὕπομιμνήσκοντες τῆς πρεσβείας, ἧς αὐτοὶ πρὸς Λιβέριον πρότερον τὸν Ῥώμης ἐπίσκοπον διὰ τῶν περὶ Εὐστάθιον ἐπεποίητο”

→端的に言えば、偽イグナティオス書簡はこの

- ①366年前後の
- ②キリキア地方を中心とする
- ③相似本質派（アンキユラ教会会議とセレウキア教会会議を担ったグループ）の、ローマ/同一本質派との合同賛成派の動き

の中で生み出されたと発表者は考える

- ◆イグナティオスの選定→信条をめぐるきりが無い争いに終止符を打つため特別の権威（初期の殉教者）に訴える
- ◆長大文書を資料としたこと：状況の類似からヒントを得た？
- ◆教理の多面性（非明瞭性）：相似本質派と同一本質派の合同という動機。また同じ傾向を持ち類似が認められるエメサのエウセビオスやエルサレムのキュリロスも人間関係的に近い位置にいたことも傍証
- ◆「タルソスのシルヴァノス」という Perler の謎かけの回収（発表者はそこまで絞り込むつもりはない）
- ◆地理的暗喩：キリキア（使節の任地、合同の中心地）、アンティオキア（メレティオス派を動かしたい？）、ラオディケイア（旧主教ゲオルギオスの支持者がいた？）
真イ：小アジア（もう一つの同一本質派の活動地。特にカリア）、ローマ（働きかけの対象）

◇異論が出ることは想定しているが、やはりこの「環境」(milieu) から出た文書であるというのが、書簡集をめぐる状況証拠に基づいて発表者が出す結論。かりに広く取っても、350年代末～360年代のシリア～キリキアで書かれた、という線は動かないと考える

◇今後の見通し

- ・偽イグナティオス書簡自体の思想をまとめ直す（外的ではなく、内的研究）
- ・「アンティオキア派」と個別テーマに即して比較
 - ☆意義：近い時代・近い地域の文書と比較できる。またヨアンネス・クリュソストモスの殉教者（イグナティオス含む）説教、モプスエスティアのテオドロスの洗礼論や三一啓示論など、従来個別にしか扱われてこなかった主題を関係づけるための補助線となる

地図

地図①イグナティオス書簡関係

(Wikipedia Commons: “The Roman Empire ca 400 AD”

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:The_Roman_Empire_ca_400_AD.pngをもとに作成)

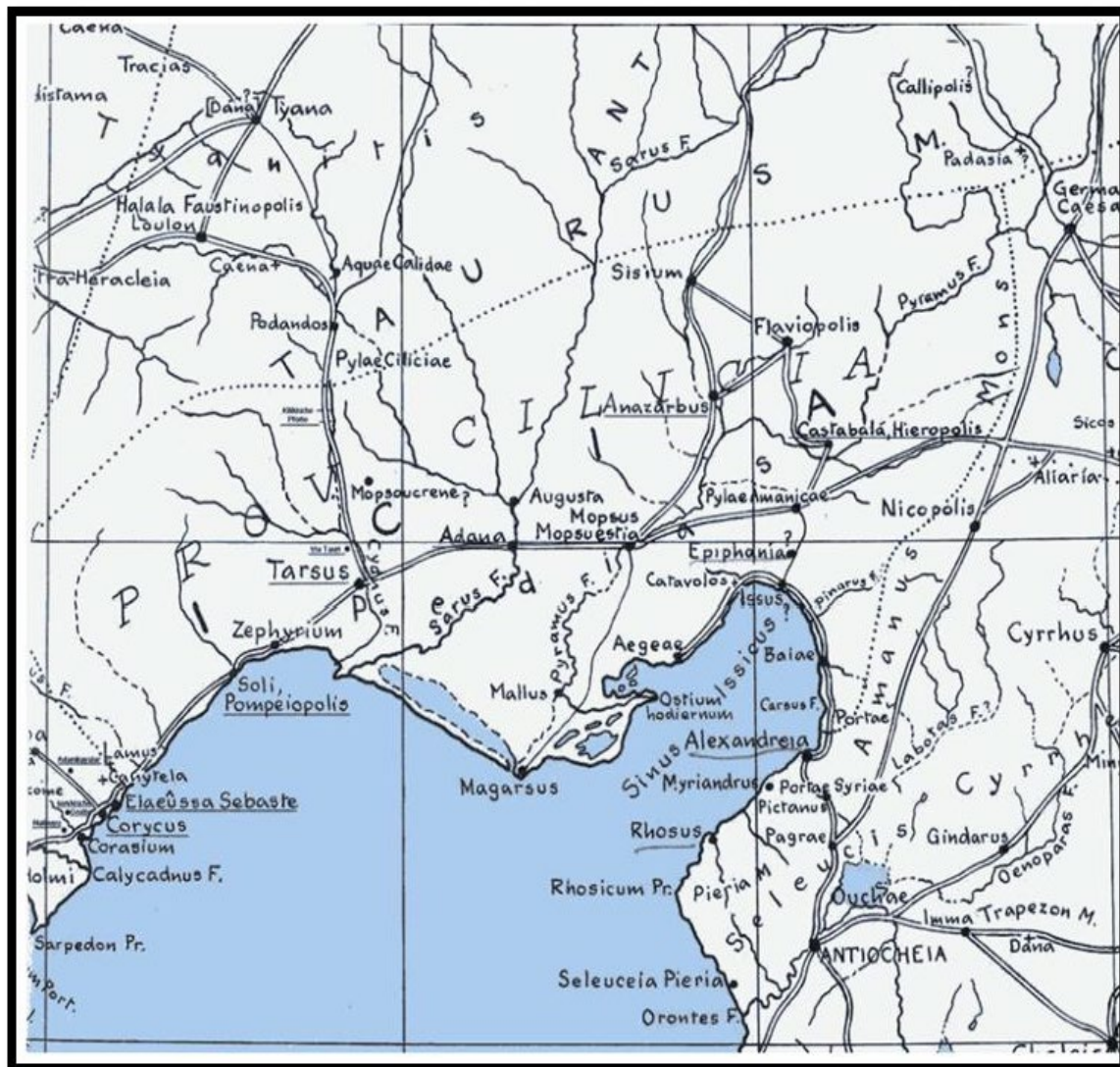


赤下線：真偽イグナティオス書簡関係

青下線：教会史関係

地図②キリキア近辺

Zeyrek 2016, 346. (from: Calder and Bean, *A Classical Map of Asia Minor*, 1958)



文献一覧

原典

アタナシオス（アレクサンドリアの）

『イタリアとアリミヌムの両教会会議について』(*De synodis Arimini in Italia et Seleucia in Isauria*)

Opitz, H. G. 1940. *Athanasius Werke*, vol. 2.1, Berlin: De Gruyter, 231-278.

真正イグナティオス『書簡集』

Lindemann, Andreas und Paulsen, Henning (Hrsg.). 1992. *Die Apostolischen Väter. Griechisch-deutsche Parallelausgabe*. Tübingen: JCB Mohr [Paul Siebeck].

偽イグナティオス『書簡集』

Diekamp, F., and Funk, F.X. 1913. *Patres apostolici*, vol. 2, 3rd edn., Tübingen: Laupp.

エウアグリオス・スコラスティコス

Bidez, J., and Parmentier, L. 1898. *The ecclesiastical history of Evagrius with the scholia*, London: Methuen.

エウセビオス（カイサレイアの）

『教会史』

Bardy, G. 1952-58. *Eusèbe de Césarée: Histoire ecclesiastique*. t. I-III. Paris: Les Éditions du Cerf.

エピファニオス（サラミスの）

『パナリオン』

Holl, Karl. 1915. *Ancoratus. Panarion (haereses 1-33)*, Leipzig, 1915

Ibid., rev. Dummer, Jürgen, 1980. *Epiphanius II: Panarion (haereses 34-46)*. Berlin, Akademie-Verlag.

Ibid., rev. Dummer, Jürgen, 1985. *Epiphanius III: Panarion (haereses 65-80). De Fide*. Berlin, Akademie-Verlag.

ソクラテス

『教会史』

Maraval P., Périchon, P. 2004-7. *Socrate de Constantinople: Histoire ecclesiastique*, t. I-IV. Paris: Les Éditions du Cerf.

ソゾメノス

『教会史』

Festugière A.-J., Grillet B., Sabbah G. 1983-2008. *Sozomène: Histoire ecclésiastique*, t. I-IV. Paris: Les Éditions du Cerf.

テオドレトス (キュロスの)

Bouffartigue, J. Canivet P., Martin, A., Pietri, L., Thelamon, F. 2006-9. *Théodoret de Cyr: Histoire ecclésiastique*. t. I-II. Paris: Les Éditions du Cerf.

ヒエロニムス

『著名者列伝』

PL 23, 631-708

ヒラリウス (ポワティエの)

『諸教会会議について』 (*Liber de Synodis seu De Fide Orientalium*)

PL 10, 471-548.

ヨアンネス・クリュソストモス

『殉教者イグナティオスについての講話』

PG 50, 587-96.

研究文献

Amelung, Arnold. 1899 *Untersuchungen Über Pseudo-Ignatius*. Marburg: G. Otto's Hofbuchdruckerei in Darmstadt.

Di Berardino, A., Oden, T.C., Elowsky, J.C., and Hoover, J. 2014. *Encyclopedia of ancient Christianity*. 3 vols. transl. by J.T. Papa, E.A. Koenke and E.E. Hewett. original: 2006-8. Illinois: IVP Academic.

Brennecke, Hanns Cristof. 2018. Die *recensio longior* des Corpus Ignatianum. In: Möllendorff, P. and Bauer, T. ed. *Die Briefe des Ignatios von Antiochia: Motive, Strategien, Kontexte*. Berlin, Boston: De Gruyter, 249-270.

Brent, Allen. 2007. *Ignatius of Antioch: A Martyr Bishop and the Origin of the Episcopacy*. London and New York: T&T Clark.

Brown, Milton P. 1964. "Notes of the Language and Style of Pseudo-Ignatius." *Journal of Biblical Literature*, 83.2, 146-152.

Cobb, L.S. 2017. "Neither "Pure Evangelical Manna" nor "Tainted Scraps": Reflections

- on the Study of Pseudo-Ignatius”, in Still and Wilhite (eds.), *The Apostolic Fathers and Paul*. London: Bloomsbury, T&T Clark 181-202.
- Cureton, William. 1845. *The Ancient Syriac Version of the Epistles of St. Ignatius to St. Polycarp, the Ephesians, and the Romans: Together with Extracts from his Epistles, collected from the Writings of Severus of Antioch, Timotheus of Alexandria, and others, Edited with an English Translation and Notes: also the Greek Text of these Three Epistles, Corrected According to the Authority of the Syriac Version*. London and Berlin: Rivingtons, Asher & Co.
- Ehrman, Bart D. *The Apostolic Fathers*. 2 vols. Cambridge, London: Harvard University Press, 2003.
- Fackler, Phillip Joseph Augustine. 2017. *Forging Christianity: Jews And (sic) Christians In Pseudo-Ignatius*. PhD diss., University of Pennsylvania.
- Gilliam III, Paul, R. 2017. *Ignatius of Antioch and the Arian Controversy*. Leiden: Brill.
- Gohl, Justin M. 2013. *Performing the Book of Proverbs: Engaging Proverbs as Christian Scripture*. The Faculty of the Lutheran Theological Seminary at Philadelphia.
- Grant, R. M. 1988. “The Apostolic Fathers’ First Thousand Years”. *Church History*, 57, 20–28.
- Hannah, Jack W. “The Setting of the Ignatian Long Recension.” *Journal of Biblical Literature* 79.3 (1960): 221-238.
- Hanson, Robert. 1988. *The Search for the Christian Doctrine of God: The Arian Controversy, 318-381*. London: T&T Clark.
- Haykin, Michael A. G.. 1982. “ΜΑΚΑΡΙΟΣ ΣΙΛΑΟΥΑΝΟΣ (sic!): Silvanus of Tarsus and His View of the Spirit”. *Vigiliae Christianae* 36 (3), 261-274.
- Lightfoot, J.B. 1889. *The Apostolic Fathers. Part 2. S. Ignatius, St. Polycarp*. 2nd ed. 3 vols. London and New York: Macmillan and Co.
- Lookadoo, Jonathon. 2020. “The Reception of the Gospel of John in the Long Recension of Ignatius’s Letters”, *Journal for the Study of the New Testament* 42 (4), 496-520.
- Mayer, Wendy and Neil, Bronwen. 2011. *St John Chrysostom. The Cult of the Saints: Select Homilies and Letters*. Crestwood, New York: St. Vladimir’s Seminary Press.
- Mayer, Wendy and Allen, Paul. 2012. *The Churches of Syrian Antioch (300-638 CE)*. Leuven, Paris, Walpole, Ma: Peeters.
- Ohme, Heinz. 2012. “Sources of the Greek Canon Law to the Quinisext Council (691/2): Council and Church Fathers”. Wilfried Hartmann and Kenneth Pennington (eds.), *The History of Byzantine and Eastern Canon Law to 1500*, Washington, D.C.: The Catholic University of America Press.
- Perler, Othmar, 1958. “Pseudo-Ignatius und Eusebius von Emesa. *Historisches Jahrbuch*

77: 73-82.

Petermann, Julius Heinrich. 1849. *S. Ignatii patris apostolici quae feruntur epistolae: Una cum eiusdem martyrio*. Lipsiae: Fr. Chr. Guil. Vogelius.

Radde-Galwitz, Andrew (ed.). 2017. *The Cambridge Edition of Early Christian Writings: Volume 1, God*. Cambridge, Cambridge University Press.

Smith, J.D. 2006. "On Pseudo-Ignatius' Fourth-Century Antiochene Assertion of Episcopal Supremacy", *Studia Patristica* vol. XLII, 231-36.

Vinzent, Markus. 2019. *Writing the History of Early Christianity: From Reception to Retrospection*. Cambridge, Cambridge University Press.

Wallace-Hadrill, D.S. 1982. *Christian Antioch: a study of early Christian thought in the East*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

Williams, Frank. 2016. *The Panarion of Epiphanius of Salamis: Book I (Sects 1-46)*. Leiden: Brill.

ibid., 2017. *The Panarion of Epiphanius of Salamis: Book II and III (Sects 47-80, De Fide)*. Leiden: Brill.

Zahn, Theodor. 1873. *Ignatius von Antiochien*. Gotha: Friedrich Andreas Perthes.

Zeyrek, Ali Nadir. 2016. *HIERAPOLIS-CASTABALA: The Urban Development in A.D. 1st to 3rd Centuries* (A.A. 2014–2015). PhD diss., Università di Bologna.

浅野淳博, 2020. 「イグナティオスによる ἀντίψυχον の特徴的用法と殉教思想に関する一考察」『新約学研究』48, 45-66.

荒井献編, 1974. 『使徒教父文書』講談社.

小高毅, 2000. 『原典 キリスト教思想史 2 ギリシア教父』教文館.

ケリー, J.N.D. 2010. 『初期キリスト教教理史』上下巻、津田謙治訳、一麦出版社.

橘耕太「ローマ人への手紙 16 章の宛て先はどこか」『キリスト教学』立教大学キリスト教学会編, 61, 23-42.

マルー, H.I, 1996. 『キリスト教史 2 教父時代』上位大学中世思想研究所 (編訳・監修), 平凡社.